

雜御  
33  
02

白雲



第貳號

大正十一年三月

自警第貳號 目次

會員記念撮影(口繪)

言論

發奮錄

肉に亡びても靈に生きよ

遊隨者に告ぐ

三根性

感奮錄

開運論

性格の訓練

偶感錄

屈するの勇

思

指月山に登りて

青年の責務

壓ゆる力と跳ね返る力

卒

五	高田良雄
四	藤井勝三
四	木原秀雄
二	福田幸雄
二	山本智斌
卒	篠原修三
會友	石川勉彌
會友	山本勉彌
會友	岩田博藏

五	宮内謙吉
五	高田良雄
五	仁尾重視

暗黒裏より見たる人生

雜感

ペンの零集不倒翁及偶感錄

私の思想變遷推移の告白

卒

雜錄

靈地に立つて松陰先生を懷ふ

幕末に於ける武士の風俗

福本日南先生を懷ふ

五

詞藻

蚊、かまぼこ賣、短信

夏の午後、夏六句

名士の面影

摘錄

明治天皇御製他十數項

會報

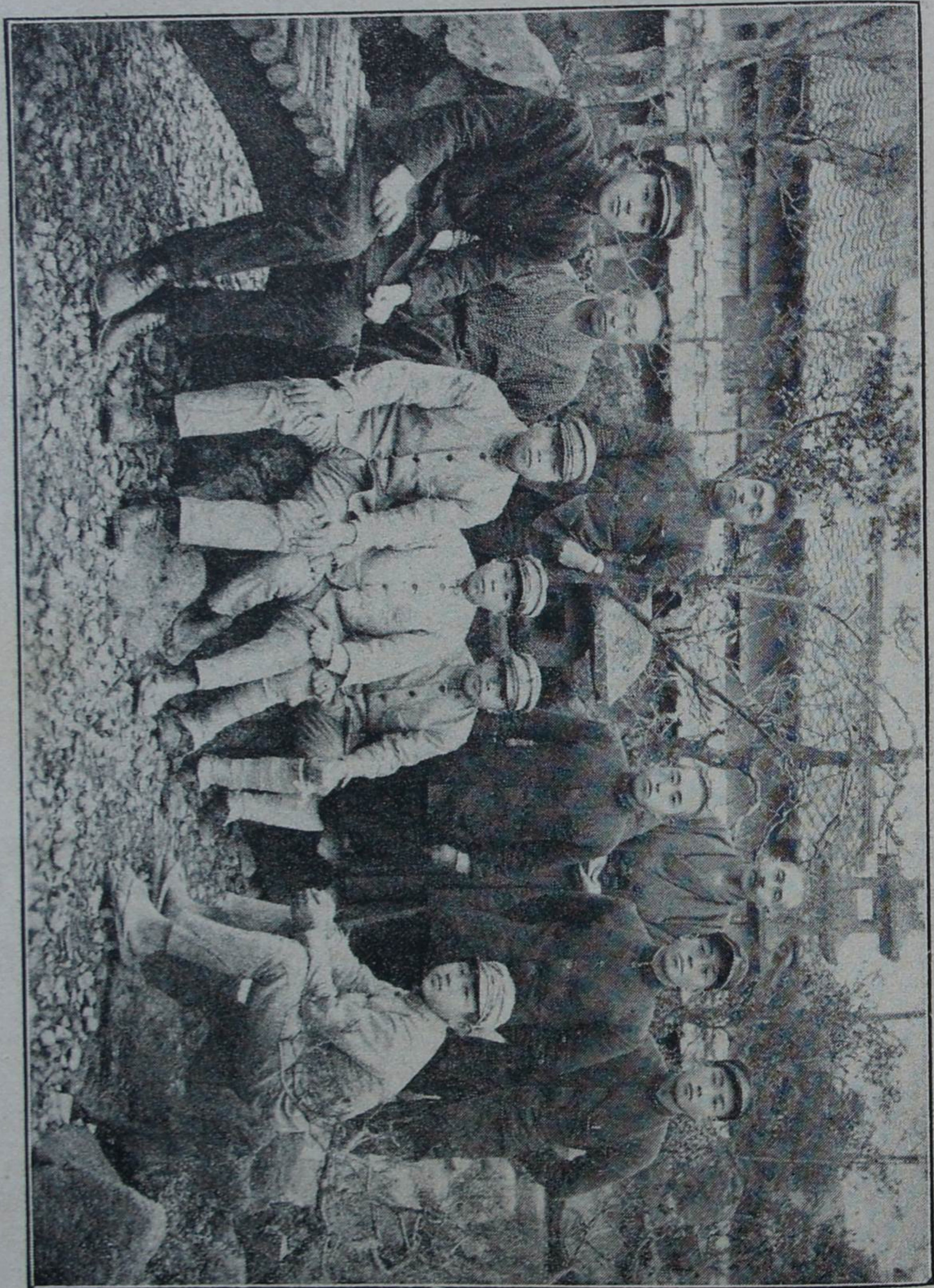
會誌、自警會規約、會員名簿

吟誦錄

藤井勝三
木原秀雄
宮内謙吉
柴田美稻

仁尾重視
井原師郎
山本勉彌

仁尾重視
藤井勝三
山本勉彌



## 言論

### 發奮錄

第五學年 高田良雄

#### 一、現代社會に要求す

青年を毒して遂に空しく墓穴の人たらしむるものは何ぞ曰く、軟弱なる思想柔懦なる風習より甚しきはなし。軟弱の存する所國家必ず衰へ、柔懦の風の吹く所社會必ず亡ぶ。然らば果して我國に此の風習存するや否や。吾人甚だ遺憾乍ら之を認めざるを得ざるなり。

現代に於きても尙或る老人中には從順を以て最も必要な徳とせるもの多し。然も從順其のものは決して退ぞくべきものに非ず。然れども從順は遂に軟弱を來す基となる事多し。如何なる言動あるも從順なるべしと言はば之斷して從ふ可からず。之青年の意氣なり、生命なり。青年は宜敷大いに四方に伸びざるべからず。吾人は益裁的青年たるを欲せず。吾人は怒濤逆卷く海邊の大松たらしむことを欲するなり。徒らに外觀の美のみを飾る婦女子的精神を大いに愧むものなり。若し如此青年を以て國家が組織せられたりとせむか、可憐其の國家たるや、國運發展を計るべからず。可惜遂に衰亡の域に達するなり。

嗚呼かく思ひて兩眼を開きて更に見よ。現代我青年の態度を甚しきは娼婦にも劣るが如き振舞を敢て爲し、恬然

たるもあるに非らずや。是固より青年の罪と雖も、又社會も其の罪は一半負はざるべからず、上流社會の人は擧つて流行の奴隷となり。中下流の者も之に雷同して只身を飾るに汲々として、其の毒害の如何に深く、且つ大なるかを知らざるものゝ如し。若し如此にして日を暮し年を送らば遂に我國は滅亡せざるを得ず。何たる痛恨ぞや現代青年よ、願くば醒めよ。立てよ。而して奮へよ。眞に青年たるものを導くものは、單に坐上の讀書に非らず。單に説法に非らず、常に接觸する社會其者あり、故に吾人は社會に切に望む。激烈たる青年をして懦風を去らしめ、思ふ儘に伸びて奮闘せしめよと。

二、愛 と 汗

現時の國際關係に基く日本帝國の立場は如何に、而して我國家の状態は如何に、國民の眞狀は如何に、吾人は此の質問に對して日夜痛恨せざるを得ざるなり。「危い哉、噴火山上に舞蹈するものは今日の日本民なり戦後多事多難の時何事ぞ樓上醉人多くして巷頭餓聲を聞くの甚しき」。見よ、聞け、此の警句を。國難來—國難來—目あるものは明かに見よ。

今や噴火口の火氣は時々刻々其の勢を逞うし爆發の機知るべからず。然るに日本國民は平然嬉々として、其の上に舞蹈して宛然醉へるものゝ如し。全世界は蔽ひて今や日本を惱しつゝある大妖怪は何ぞ。曰く、暴力的社會主義是なり。今や其の勢力は何處所を知らず。社會は擧つて其の渦中に陥るものゝ如し。吾人は何處までも社會主義に抵抗し以て之が破壊に勉めむとするものに非らず。然れども彼の有産階級獨占の政治に代ふるに、無産階級獨占を以てせんとし、此の目的を達する爲に暴力を以て有産者及貴族を滅盡せんとする過激主義の如きは、極力反對せざるを得ず。今や日本は開關以來會て遭遇せざる大國難期に在り。斯かる大危機に會しつゝあるにも拘はらず、國民の大部分は依然として桃源の夢を貪りつゝあり、何たる憂事ぞ、嗚呼危險—危險—冷汗背を濡すを覺ゆるなり。帝國の危機は革命派の勢力増大にあらずして其の勢力の刻々増大しつゝあることを國民が深く注意せざる現狀にあり。

嗚呼斯る現狀を引き起すに到りし其の動機は何ぞ曰く、下流社會に餓聲勃々として起るを有産者が徒衣徒食以て窮民を救ふの策を講せず。政治家亦彼等の意を迎へ、労働者の切々たる要求を容るゝこと極めて吝なりければなり。労働者は平和の手段にて解決の道なしと速断し一は自己の饑渴問題より一は愛に汗の敵を撃破せんとする大義より出でし事なりとせんか一片の同情を寄せざるを得ず。而して有産者及政治家に大愛の精神獻身報國の精神の活けるや否や實に疑はし。

是によりて之を觀れば現代の狀況は寧ろ自然と云ふべし。嗚呼吾人は叫ぶ。愛と汗との缺乏は遂に此の大國難を致したりと。心ある者、誰か悲憤慷慨せずして止まむや血あり、涙あるの士は白熱化せよ。猛烈なる一大火團となれ而して。不義不正を焼き盡せ世をして愛と汗との塊となせ。以て大日本帝國の建國の大理想を實現せよ。

肉に亡びても靈に生きよ

第四學年 藤井勝三

此身は四大の寄細工で「我」と云ふべきものは何一つとして無い。寄細工である以上生住壞滅の順序を経て地は地

水は水火は火風は風とそれ／＼分離し去るのは勿論の話である死は當然の運命である譬へば柵頭の傀儡が本來空の木の端竹の串に還る様なものである「生死去來柵頭傀儡一線斷時落々磊々」真に死は當然の運命とせねばならぬ「倅しや今朝見し人の面影の立つは夕暮の空で朝を以て夕を計ることさへ出來ないのである誰しも望む所は我てふものゝ永久にあることである四大の假和合なる人間がどうして現在を續けることが出來やう此に於て吾人は叫ぶのである肉に死してもなほ靈に生きよと華々しい生涯を持つた英雄も矢張人間である寄細工である彼等の肉と靈は互に離れたが其赫々たる靈はなほ生きて我々を勵まして居るのである如何に豪奢にあり我儘にあつたにせよ清盛入道は確に一個の偉人たる量は充分にあつた彼の肉体の將に崩れんとする大事の際の言葉こそ實に壯なるものであつた「兵衛佐頼朝が首を見ないのはかへす／＼も残念である自分は死んだと云つても佛事孝養は愚か堂塔も建て／＼はならぬいそぎ討手を下し彼が首を刎ねて我墓前に懸けよこれぞ我に對しての今生後生の孝養であらうぞと」一念の執著に心衰の運命をもとせす三世の因果を身にひくともなほ怨敵を亡はさうとしたのであるこの靈は頼朝が墓穴に入るまで附き纏つて居たに違ひない清盛は死んだ然し彼の靈はなほ生きて居たのである此の脆い寄細工の身を以て何事を爲さんとしても何時破れるかは計り知ることが出來ない此に於て肉に亡びても靈に生きる覺悟が無くては無らぬのである。換言すれば空間上より時間上に生きるを欲するもので無ければならぬ、楠正成は果して何れに生きてであらうか足利尊氏は果してその孰れに多くの生命を保つたであらうか正成は自身ばかりでなく其一家一門を擧げて南朝の爲に盡し事己が意に違ひて淡川に七生の憾をのんで散り果てた實に當時空間上に於ける彼の生命は頗る短かいものであつた尊氏は西海より盛り返して當時空間上に於ての大膨張であつた。が彼の其肉の亡びるや其靈も全く死んで仕舞つて今日迄逆賊の汚名を蒙つて居るのである之に反して正成の靈魂は永久に生きた彼の光輝ある事蹟は我大日本帝國のあらん限り傳へはやされるであらう我々は生を此世にかつた以上満足に一生を送らねばならぬのである即ち意義ある生活をするのが肝要である其の生甲斐ある生活は空間上に於ける肉は亡びてもなほ時間上に於て靈に生きるを主眼とせなければならぬのである。

□遊惰者に告ぐ

第四學年 木原秀雄

戰塵既に收まりて世人漸く平和來と唱ふ。然れども眞に平和は未だ來らざるなり。物價は騰貴して人心恟々たり新思想は日に殺到して輿論囂々たり。曰く生活問題曰く勞働問題曰く普通選舉。今や議論は紛々として定まる所を知らず。改造の號び各所に起り、宣傳は隨所に行はる。眞の平和來は永遠の事にして今日の平和は皮相のみ。彼の當面の華府會議は抑も何を語るか。國事今や方に多端なり、然るに何んぞや我國民漸く驕奢に奔り遊惰に流れ人徒に物質主義に赴き日本魂の根底將に危ふからんとす。沈思せよ。默考せよ。遊惰の生活をなすの秋なるか。惰眠を食る際なるか。世に遊惰は恐るべきものはあらじ見よ舉族高位顯官に在りて平氏にあらざれば人に非らずと迄揚言せし彼等をして僅か二十年に亙る悲惨なる末路を辿らしめしに非ずや。誠に恐るべきなり。其の身高官に在るが故に、其の身巨万の富を有するが故に遊惰をなすとも可なりといふ理なし。否彼等こそ躬う勤勞して下を化し下を風せざるべからず。されば遊惰は絶對的に不可なり。殊に青年に於ては然りとす。青年は

人生の春なり此の期にして優遊徒爾するは花の咲くべき時を逸して遂に實を結ばざるに到るが如し。然るに何んぞや。現今の青年には未來の空想のみに耽り大行は小僅を顧みずとか或は自ら古の英雄に擬し、一旦風雲の變に乗れば何事にも成就すべしなどと思意するものあり。然れども文明は日進月歩し社會の秩序整然たり。彼の英雄的傳記的成功の時代は既に過去の部に屬す。されば成功は奮勵努力によつて云ふ迄もなし。遊惰の恐るべきは人心を腐敗せしむればなり。その不可なるは人としての當然の道にあらざればなり沈思せよ。默考せよ、己が職務に忠實ならずして安々と暮すことなきか、學生にして學業に汲々たらざることなきか、大工にして鑿を手にせざることなきか、勞働者にしてその額に汗せざることなきか。更に熟考せよ己がなせる遊惰の生活は永遠に持續すべきものなるか、浮雲の如きものにてはあらざるか、而して苟も否と悟らば今日よりして奮起すべし。

今日我國は奇峭巖上に立てる一小孤屋なり。近代思想の暴風雨目前に迫りぬ。國家は今や汝一人を要求す。起て奮へよ、而して漸新濺刺たる意氣を以て革進發展すべき危機に臨むで立てよ。今にして覺めずんば外患内憂後より到るや必せり。覺めよ悟れよ。

□三 根 性

第二學年 福 田 幸 雄

嘗て三根性なるものを或る本にて見たことがある。それは依頼心、嫉妬心、猜疑心の三である。依頼心、之を言ひかへれば自立の精神に乏しいと云はねばならぬ、獨立獨行の精神に乏しくて、何が出来るか、

地位や勳功も自ら勉の勵んだ結果得られるのである。若し人に頼つてゐらんとて、之は眞實の名譽でもなんでもない。松陰先生も「大丈夫自立の處なかるべからず、人に依りて貴く人に依りて賤しきは大丈夫の深く耻づる處なり」と言はれて居るではないか。自らすると云へば努力と苦心を要する、之を爲すに勇氣の入用なことは無論である。

嫉妬心、之他人をねたみうらやむのである。あゝあの人はねらいな、自分は何故かうつまらぬのだらうかと考へたり、なにあんなねらいと云つたつて、かうくだど、ありもせぬことまで持出すのである。明智光秀が秀吉の聲望の獨り盛なるのを忌み、兵を擧げて秀吉を除かんとしたが、之を滅はすこと能はずして却つて之に滅ぼされてしまつた。かくて自ら己れの滅亡を早めたわけである。吾人は常に心を大きく持たなければならぬ、嫉妬心の強き者は小膽であるものである。

人をやたらに疑ふを猜疑と云ふ。この心強ければ自分の損である。かの源氏の早く滅んだのは何の爲であらうか之實に頼朝が猜疑心に深かつた爲で之か故に血族を多く殺したからである、折角源氏の幕府を開いて置きながら僅かに三代で滅亡するとは、随分馬鹿々々しいことではないか。

以上三根性なる者實に恐るべきである、之等の心があるばかりで立身出世をさまたげ、我が身の滅亡を早めた者は多數である、この根性は人によくあることである、吾人は勉め勵んで之を心中よ。除かなければならぬ。

## 感奮録

第二學年 山 本 斌

=(8)=

### 一、實行と努力

思ひて實行せざれば何の値あらんや、例へば勇氣と云ふ言葉あり。その勇氣と云ふ言葉のみにては我にとりては何らの意義なしと思ふ。これを實地に行ふてこそ光は放たれるのだ。何事も言語は實行によりて光は出る精神一到何事不成との語にても之を唱へたりとて人の身の實行が出来なければ何にもならぬ。我等は人間だ。又我等は人間の中の人間とならなければならぬ。一たん世に出た以上平々凡々死に等しき者にならんや。一時の樂は永久の苦予一時の苦は永久の樂で、偉人の苦は當人にとりては幸福と思はん而して樂き事否面白き事は却つて面白からずたのしからずと信するならん、ごうかして我等は成功の岸。光ある彼岸に達したい否々偉人の域に達したいのだ。

これも思つて居ただけでは何にもならぬ奮勵努力して正義を踏み向ふのだ人間は一度死んだらもう生は求められぬ。斃後已たとひ身は死すとも心は死せず七生報國の心にて。事業にとりついて大ひにやれ失敗となるも意とするに足らぬ。この失敗は努力して失敗したのなら。邪道にて富になり成功した者よりたしかに値あり。死して後どちらが後世の範となるか諸君の御判じにまかす。

### 二、希望

人にして希望なき者は水平線より以下の者なり。何等の希望なくして生きて行き、いつとはなしに早や石と成る馬鹿者が世に多い、吾人之を稱して米食機と云ふ。生を天地の間に受け、其國家に捧身せざる者は一種の米を食ふ蛆にすぎず。我々は蛆になるか、米食機となり了はるか、否々我々は大なる希望を有し、大なる空想をいだかなければならぬ、而し唯空想するばかりではいかぬ、其空想を實現しやうと云ふ確固不拔の意思を持たなければならぬ。全世界を統一しやうと云ふことも一つの空想なり精神一到何事不成、之も全然實行出来ぬ事もあるまい我大日本帝國臣民たる者は御國の爲め、又世界の爲め大なる希望をもたなければならぬ。朝は東天を拜し、一朝事あるときは、國家社會の爲めに身を捧げんと希ひ、夕には夕陽のため紅に彩られたる西天を望み、今日一日を反省すべし、而して何等捧身せし所無く朝の望みを貫徹せざりし者は明日の米を食ふ勿れ、いさゝかにも其望みを達したりと思ふ者は明日の食を心よくとるべし。かゝる決心をもつて漸次身心を鍛練し、吾人は大なる希望を立て社會に貢献すべし。

### 三、何事を爲すにも精神を快く持つ可し

心臆々して行く者は眼中に見ゆる物皆心に感ずる事皆魔の路死の海也心確固不拔の精神なる者は眼に映じ心にうつる物皆悉く光の野幸福の山なり。老幼男女の別なく何人も皆心を快く持ちて臆々せず何事をするにも興味を持ちてする者が今日の社會競争生存競争に勝を占めるのた何人もいやだ好まない面白くないとか云ふのは大抵興味

=(9)=



を以て事に當らないからである。何れ人間と生れたる以上は必ず死す。而して其一生には腹のいびくりかえる事をせなくては駄目だそれには何事をするにも興味を持つて進まなければならぬ。人々が厭だど云ふ事にも興味を以てやればねのすと上達するそのまゝいやだいやだど云つて居れば上達の見込無し近世否古今に通じての大偉人は皆事に快を以て當らざりし者無し重ねて吾人は云ふ「事に當るに快を以て興味を以て何事もせねば偉人にはなれぬ同じ死ぬなら少しく頭を高くして死ね望あり大なる望ある者は何事も皆快にして事に當れ」

□ 僕 の 氣 概

卒業生 金子 榮 一

至誠と猛進、これ僕に始めて絶大なる偉力を有することを堅く自覺せしめた。懐古すれば眞に誘惑と戦つて或る時は負けた事も二三遍あつたが、今日初めて一大鐵心を得るに至つて初めて體にして氣これを味ふを得た。僕はあらゆる諸徳は皆至誠より出づるものと信ずる。而して渺たる此の身が全く至誠の塊、至誠の結晶となるに至れば一種の強い靈能即ち大勇猛心を有するに至り、其の極致は非常に強い者となりて孟子の所謂威武も屈する能はず、富貴も淫する能はざるの人となり得るのである。此の世の中には何んにも恐るゝものがない様になる。人間の最も恐るべき死たも辭せない精神が出来るのである。其の例は一度書史を繙けば、歴然として明らかである。これが僕の宗教である。而して今や此の極致に向つて猛進しつゝあるのである。孔子の所謂自ら省みて正しくしば千人ありとも我行かんと豪語したのも又二十一回猛士の「未嘗至誠不動者有之也と堅く信じたのも皆至誠の偉大なる力の表現である。然るに現代の青年は奈何。至誠など唱へる者は愚物として目し。社會に出でては大いに

悪強くなくては成功せぬと考へてどん／＼社會に出るのである。僕の痛憤措く能はざるところである。殊に現代の學生間に於いて彼の竊盜に等しき不正行爲なるもの僕が中學時代より今日に至るまで絶えず目撃して痛憤措く能はざる所である。此の卑劣行爲を他生徒に得意然として話して毫も恥ぢないのが現代の學生である。是れ現代の教育が智的方面に偏してゐて徳育方面を無視してゐると言ひ度いがるれも一原因であらうが、要は個人々が自覺修養に心懸けないからである。茲に一寸言ひ度いごとが一つある。僕は東京の學校に入學して以來東京の學生間に恐るべき悪弊あるを見出したのである。其れは浮華輕躁の点である。實に不眞面目で墮弱に流れてゐて質實剛健などの精神は毫末もない。頭は油で好香紛々として嗅ひて、學業など外にしてやれ音樂會の芝居の又歌劇などの皆狂氣の沙汰である。集れば淫語卑語實に癩に障るのである。眞面目な着實な青年が嫌はれ、浮薄輕躁兒が喜ばれるのが現代の學生界に見逃すべからざる現象である。女のことを得意然として話してゐる者が現代學生間の所謂開けた人、話せる者である。又一方彼等は徒らに嶄新奇抜な斬らしい思想を好む傾向ありて學識を装ふ一種の虛榮心を持つてゐる。又近頃非常に流行する歐米の軟文學を耽讀し性の戀愛のと議論をしてゐる。維新時代の青年とは其の着目、及び意氣は雲泥の差である。斯くまで墮落したる現代の學生界は果して誰の罪か。これ社會の罪である。社會に確固たる思想がないからである。此の風潮に處して少しでも質實剛健の精神を注入したいといふのが僕の希望であるこれがためには自ら至誠に身を處して所謂大勇猛心を必要とするのである。孤立嫌厭せらるゝは少しも意とするに足らぬのである。何んとなれば僕の眞の知己は古人に澤山持つてゐるからである。自ら烈士を任じて目下の惡潮弊風の中に處して闘ふ士と任するのである。壯且快なることではないか。而して斃而後

已といふ精神を持つて奮闘的生涯を終へたいと思ふのである。これは僕の最も快とするところである。人生は僅か五十年七十は古來稀なりだ。此の間よい意味に於て他を顧みずして自分の目的に向つて大至誠の精神を持って猛進に猛進暴猪の荒れ狂ふが如く精あらん限り力あらん限り奮闘するのである。僕の號を命名して狂骨と云ふ。これ前述の意味を語る二字にして此の世の中を狂へる獅子の如く暴れ廻りてこの剛腹の醫するまでやる意味で其れに骨即死を加味して一層心を跳らす一種の「インスピレーション」を與へるのが此の號の二字である。以上述べたことを唯の空言に終らずして堅くこの大至誠の大精神を持って奮闘的生涯、精神的生活を續けて斃而後已のみだ。

開 運 論

卒業生 篠原智雄

世路の崎嶇艱難は、之を譬ふれば、劍戟相磨し、干戈相交るの戦場とも言ひつべし。敵は我が左右にあり、前面にあり、後背にあり。全力を擧げて之と戦ひ、之を討ち、之を平ぐるにあらずんば、果敢なくも浮世の敗軍者となりて、共に兵を語るに足らざるに終らん。誠にや人生は激烈なる戦場なり。如何なる男子か、能く之の戦場の勝利者たるべき。暫く例を砲煙彈雨の戦場に見よ。不能の二字は唯愚人の辭書中のみあり。と言へるナポレオンの行動は、能く歐洲の天地を席卷するの大業を畫したるにあらずや。當時彼の眼中不能なく、意志の向ふ所何事か成らざらんと信じたりしなり。源義經が連戦連勝、向ふ所敵なきの慨ありしものも亦勇往邁進の意志に由るにあらずや。人生の戦場に於ても亦此邁進の意志こそ、戦捷の最大近因なれ。狐疑逡巡、去就に惑ひて決する

能はざるは。是失敗の近因なり。徳川家康の關原の戦に出でんとするや、家臣某之を止めて曰く、「今敵は西方塞れり、其方を避けて出發せよ。」と。家康笑つて曰く「今西方塞れば、吾討つて之を開かん。」と、鼓行して西し、終に大勝を博しぬ。家康にして狐疑し逡巡せんか、機會は終に逸したるやも知るべからず。運は天にあり、之を捉るは人にあり。ナイルの海戦前、チルソン其の作戰計畫を幕僚に語る。幕僚曰く、若し斯の如くにして勝利を得ば、我英國の名譽なり。と。チルソン之を遮つて曰く、かゝる場合に若しと言ふ如き疑惑の字を入るを要せず、吾人の勝利を博する、疑あるなしと此自信の力を以て世界戦史上著名の勝利を博しぬ。吾人が人生の戦場に向ふも亦實に此の勇往にして疑はざるの意志なかるべからず。西哲曰く、我れ唯目的に向つて進むのみ、後にあるものを顧みず。と。此の決意、是成功の秘鑰にあらずや、成功の秘鑰は一意専心勇往邁進にあり。

人生の戦争は一時的に非ずして永久的なり。生より初り死に終るの間、吾人は一日も戦場にあるを忘るべからず。若し夫れ一時の成功を以て得たりとせんか、次に來るべきものは失敗なり。よし失敗の甚しきに至らずとも、社會の進運に伴ふ能はざる無用の長物となり了らん。吾人は世の所謂成功論者を厭ふ。彼等の所謂成功とは何ぞ、數萬の富を得たるものなり。高位高官に上りしものなり、下りては卒業證書を得たるもの、新聞紙上に名を知られし者なり。嗚呼世間沼々として皆小成に安んじ名と利とをこれ追ふ。寧ろ嘆すべきにあらずや。思ふべし、彼等の成功者と目せらるゝの時は、已に進歩の停止せし時なる事を。社會の進歩は一日も停止する事なし、されば此の進運に貢獻すべき吾人の向上を亦一日も停止して可なるの理由なし。斯に於て、進取して止まず、理想を高遠の境に掲げ、目的を向上の一路に置き、社會の進運に貢獻し、以て天地の化育を助くるは、是人生活動の原義

なり。人生の戦争は不斷の戦争なり。己にして不斷の戦争ならば。一時の成功も以て頼むに足らず、一時の失敗も亦意とするに足らず。逆境にありて努力奮闘、終に成功の域に達せし偉人は古往今來の例に乏しからず。逆境にありて其の志を挫かず、却て成功の動機となす、是此の堅忍不拔の意志は、以て彼等が運命を開拓せし原因にあらざるなきか。花は雨の過ぐるに隨て紅いよ／＼濃に、柳は風に揉まるゝに隨て綠益々深し。利刀は千鍛萬鍊を経て初めて成るべく。名玉は切瑳琢磨を経て初めて成るべし。逆境は忍耐を教ふ。忍耐は意志を鍊磨し以て運命の門戸を開かしむ。人生の戦場に立つには、必ず此の忍耐を把持せざるべからず。忍耐を把持して進む、進み進んで止まずんば、吾人はよし外見上何等赫々たる功業を樹つる能はずとも、己に精神的に偉大なる成功を遂げたるなり。

人事は錯雜にして、吾等が爲すべき事業頗る多し。吾人は高位高官者を指して成功者と思はず。巨萬の財産を造るの徒を目して成功者と思はず。學位あるが故に成功者となさず。出るに馬車あり。入るに高樓あるを以て成功者となさず。吾人の以て成功者と思し得べき者は、自己の稟性に従ひ、自己の至誠を致し、自己の最善を盡して其業を完成するのみにあり。吾人の任務は出來得る限り自己の力を盡して社會の進運に貢献するにあり。此任務を全ふる能はざるの徒には巨萬の富、高等の官ありと雖も、成功者の名を冠する能はず、能く此の任務を全ふる者は、其の人は煤烟盛に機關の音轟々たる中に働く職工なりとも、隴畝の間に土堀るの農夫なりとも以て成功者の名を冠すべし。己の最善を舉げて社會の進運に貢献するは、是即ち宇宙の理想に向ひ、天地の大道を行ふものなり。此理想に向ひ大道を行はんが爲に、其の手段として官吏たり、富豪たり、學者たる、是正當の順序なり。

り。若し道にして行ふべくんば、新聞配達となり、車夫となる、何の不可あらん。成功といひ、不成功といひ地位の上下を以て言ふべきに非ず。財力の多少を以て云ふべきに非ず。要は其道を行ふの如何にあり。社會共同の實悟得せられたる今日に於ては、悟人は職業に仍りて貴賤を分ち、尊卑を立つるが如き人爲的區別に迷ふを要せず。己の任務を盡して、勇往邁進、堅忍持久、以て社會の進運に貢献するを得ば、斃ると雖、悔無けん。吾人は開運の門を窺ふの手段として智識を涵養し、人生の競争場裡に立つの覺悟として意志を修練し、共同生活の圓滿を期するが爲に道念を養成せざるべからず。此三は運命開拓の三要素あり。之を更に細説すれば、吾人が自己の立脚地を得んとするには、自己の稟性を察し、其長所と短所とを明にし、以て従事すべき業を選び更に時代の變遷を考察して其業の果して社會の進運に貢献し得べきかを思ひ、又周圍の境遇を明にして、自己がよく此の職業に堪え得べきか、如何なる方法を以て是が完成を期すべきかを考へ、次に、社會の競争場裡に立ちて、百折撓す千挫屈せざる堅忍不拔の意志と、勇往邁進の氣象とを養ひ、忍耐と勇氣とを以て之を敢行し、進み進みて止まざるの決心なかるべからず。是人生の戦場に立つ吾人の覺悟なり。社會の進運に貢献する吾人の任務なり。かゝる一面に奮進努力すると共に、社會の共同生活を圓滿ならしむるの任務を自覺し、誠實と同情とを以て人に對し世に處す。是運命開拓の順序にあらざるなきか。想ふに失敗の原因は、多くは事業の選擇を誤るにあり、其の事業に對する智識の足らざるにあり、體力の是に伴はざるにあり、意志の薄弱なるにあり、勇氣の足らざるにあり、誠實の心無きにあり、同情の念薄きにあり。自ら顧みて之を思へば、其原因の他にあらずして己に存するを發見せん。自己の稟性の商業家に適せざるに商業を企て、自己の體力の勞働に堪ゆるに勞働者たらんと欲し、時代

は駭々として進むに、時代遅れの業を營み、周囲の境遇は全く其の不用を告ぐるに、自ら之を計る。是實に智識の涵養の足らざるより來る失敗にあらずや。一敗直に志を挫き困難來る毎に其業を轉す。轉じ轉じて唯安きを貪る。斯の如きは堅忍不拔、勇往邁進の意志を缺けるより起る。天下豈安きを求めてなるの業あらんや。營むに誠實の心なく、徒に他を排して自ら利せんとす。此に於てか、共同生活の圓滿を傷け、終に自ら失敗を招くに終らん。吾人は自ら己の運命を開拓せんが爲に、其智識に於て、其の意志に於て、其道念に於て、不斷の修養なかるべからず。社會は進歩す、吾人も亦一日も怠るべきの時あらんや。成功の以て成功と目すべきの時無きが如く、修養も亦停止するの期あるべきにあらず。

吾人の目的は道を行ふにあり。苟も道を行はんとせば、先づ吾人の生活をして道に適はしめざるべからず。是智識、意志、觀念の不斷に必要な所以なり。吾人の活動をして徒に目前の成功に満足するに止らしめば、其の修養も一時的のものたらしむべし。苟も吾人の目的をして永遠にあり、吾人の成功を以て終るの時なしとせんか、吾人の修養も亦不斷ならざるべからず、吾人は如何にして此の修養を企つべき。想ふに吾人の心思は浮泛なる紙片の如く、他の爲に動かされ、情の爲に制せられて、風のまにまに東奔し西走す。これを一所に定住せしめて、惑亂なく、顛倒なく、艱難に處して狂はず、迫害に遇ふて惑はず白刃頭上に下るとも泰山の前に崩るゝとも吾は我が志す所に向ひ、嘲笑我が耳に入れども顧す、笞杖我が身に加れども動せず、吾は吾が行ふ所を行ふの至誠あり、意志あり、勇氣ありて初めて大業を畫すべし。此の至誠、此の意志は如何にして得、此の勇氣は如何にして養ふべき。信念の人生に必要な。豈これが爲なるなからんや。信念の要は精神全體の安慰を得るにあり。

此の心をして眞善美圓滿なる理想の境に安住せしめて、毀譽に動されず、慾性に惑はされず、以て活社會に活動を試みるにあり。吾人の心をして眞善美理想の境に向はしめば、風のまにまに浮動する紙片も大磐石に貼付すれば動く事なきが如く、吾人の浮泛なる心も初めて安住の地を得て迷ふ所なかるべし。信念より出でて實踐的に供すべき修養法を倫理的修養法といふ。倫理的修養の方法は夥多なりと雖、其の最も簡易なるは、一定の規律を設けて、我が心身をして墮落せしめざらんと力むるに過ぎたるは無し。吾人の心は動き易し。こゝに規律を置きて、以て之を律し、以て之をして軌道を逸せしむることなく、修養功を積まば、習慣は第二の天性となり、以て其の品性を陶冶し、長を養ひ、短を去り、終に自ら規矩に仍らざるも、心の向ふ所、自然に社會の進運を助くるに至り、平常心是道なるを得ん。吾人の修養は以て此の域に達せざるべからず。此の修養を以て進むべきに向つて進み、行くべきに向つて行かば、艱難我に於て何かあらむ、困苦亦何をか我に加へん。我に天地を動すの至誠あり、我に鬼神を感せしむるの至情あり、我に堅忍不拔の意志あり、我に勇往邁進の氣象あり、運命の門よし堅くとも、之を開くに於て何の難き事かあらむ。

□ 性 格 の 訓 練

會 友 石 川 修 三

薰化といふことは古人の考へた如くは、授けられると思ふのは少しく誤つてゐる。或場合には女子等に於ても反情を惹き起さしむることがある。よくあることであるが寄宿舎の舎監と生徒との關係などは舊式の訓練方法たるを免れぬ所もある。即ち強ひて徳はそのまま授けらるると考へたのは舊式である。躰等も個人々々の差異

を考へなくてはならぬ。しからざれば現今の通弊たる劃一的に傾いてしまふのである。徳は強ひて授くべからざるものであつて個人の天然の力を善導して自得せしむるものである。即ち道徳は人の自然的要求であつて他より強ひるべきものでない。この考から道徳は自己の要求に一致するものであるとの考を得させたいものである。しかして性格とは道徳實行の能力をいふのである。故にその本領は實行にあり。しかして實行の能力は實行によりてのみ得られるものである。これは最近の學說にも見ゆる。又かのアリストートルは既にこれを道破してゐる。最近にこれが唱へらるゝ所以は知的に偏した教育に對して起つた反動からであらう。作業勤勞主義或は言葉を換へれば作練主義の要領は訓練上この点にあるのである。例へば朝起といふ習慣によつて考へて見るとこれを實行することによつて成立するのである。決意丈では不十分である。それ丈では内部の思想となつてゐる丈で外部に表はれて實行となつてゐないからである。勤勞の習慣は即ち勤勞することによつてのみ得られる。説話した丈熱望させた丈決意させた丈では不十分であつてそれが實行の上に表示されなければならぬ。故に多年に涉つて實行せしめよ。故に實行の意志活動の意志を練らなければその訓練の要点を逸してゐる。獨逸人の勤勉なのは世人の認むる所であるがそれは訓練の結果であつて遺傳的のものではない。英人米人の自治の精神もそれを實行して得られたものである。意志活動が本領である即ち意志の集中が必要である。身軀を鍛鍊することによつて身體は鍊られる。体育の講義を聞きさうの書物を讀んでゐた丈では駄目である。智識にしてもその智識を活動させて始めて發達する。數學の問題を解決する等も一つの知力の訓練である。意志もこれと同じ譯である。思想の玩味丈では駄目である。倫理學を惡くいつて知慧の遊戯であるといふものさへある。勤勞の説明がよくても生きたる道徳の上からは實行が伴はなくては眞に國民の價値を判定することにはならない。性格は天賦的のものではない。考へ方によつては遺傳であるが實際の事實うら見ると訓練から成立するものである。

## 偶 感 錄

會 友 山 本 勉 彌

### 猫 に 小 判

菊屋家藏する所、伊藤公爵志を舒ぶるの詩に痾疾慕英雄萬死平生心と云ふ句あり、其意は自分は英雄追慕病に罹り、常に英傑の傳記を讀む、而して平生より死を以て事に當るを期すと云ふあり。英雄を追慕する者にして始めて英雄と成る事を得、公の遺勳の赫々たる其平生の心がけよりして將に其然る所なりと思ふ。萩地は多くの英傑を出し、殊に吾人の師と仰ぐ松陰先生の遺物は松陰神社を中心として多く存在し、吾人修養に志す者には願ふてもなき恰好の土地なり、宜なり千里を遠しとせず、志ある青壯年者は神社に參拜し、或は神社の附近に起臥して先生の偉大なる精神の感得に努力する者あるは、翻つて萩地の者は如何にと見れば、先生の事蹟に就て詳しき研究家あり、神社の世話をする人は多いが、眞に先生の精神を体得して先生の大主義を顯揚せんと努力する生氣激刺たる人の少なきを嘆せざるを得ない、偉人を懐に抱くと云ふも、偉人を追慕する念慮なくば、猫に小判の譬喩の如く、或は珠を抱いて罪ありとの感を起さざるを得ない、己れの偉大となる事を願はず唯本能に従つて悠々無爲儉安を事とする青年よ、嗚呼諸君は猫となつて松魚節のみをあざらんとするか。

維亦松陰門下の人

大正十年十月五日元田鐵道大臣松陰神社に參拜し、松下村塾内に陳列せる諸寶物を觀覽し、留魂録を手づからとりて熟視し、感慨に堪ゆるものあり。また至誠而不動者未之有也の書を見て曰く、至誠にして動かざるものなしとの信念は真によきも、世俗の事至誠のみにて通らざる事多々あるは遺憾なり。先生の如き人にも遂に不遇の間に死す、余の實感によるもさまで偉大ならざる人物にして随分高位高官に達したる人あり。余も今少しくするく賢く立ちまはれば、今日以上の位置をかち得たるなるべきも、今漸く伴食大臣に過ぎずと苦笑の内に、現代社會の欠陥に對する深酷なる痛憤の意を漏らす。又曰く品川子爵は松陰先生の遺訓を最も正しく遵奉し、一身一家を思はず、國事に盡したる人ありと信す。品川子爵の國民協會設立當時余は非常の愛顧を受け、一時人は子爵の後繼者を以て余を自したり。余は今日までの行動を自ら顧みて先哲の名を耻しめずと考ふ。果然國東元田肇氏は政界に於ける乃木將軍にして、其言行によりて知らるゝ如く明かに松陰門下の人なり。

人爵と天爵

正義を唱ふる者の時に迂なりとして疎んせられ、俗論に迎合する者の世にときめく事あり、元田鐵相の世俗に對する痛憤の思ひもさる事ながら、時世に入れられざるを以つて直に其人を不遇なりと斷するを得ない、要は棺を蓋ふて後百年始めて其人の遇不遇を判じ得ん。余を以つて見れば松陰先生は誠に好運の人なり、彼の暴戾なる幕論の下に死したりと云へ、其死に因りて先生の面目は躍如として光輝を發し、ある意味に於て誠に其死所を得たりと云ふを得べし、先生は齡僅かに三十、而も其遺志は悉く同志の士によりて行はれ、其事蹟は詳かに青史に残り、靈威赫々たる神格者として永く護國の神として祭祠せらる、先生は實に天爵の人なり。吾人は人為的に與へらるゝ爵位を以つて無上の光榮なりと考ふる能はず、現代に時めく事のみを以つて満足する能はず、人爵はなくもよし、あるも亦さまたげず、要は現在將來に涉りて萬人より渴仰さるゝ人格の光即天爵を有するを尊しとなす、吾人の修養と云ふも唯此天爵を得んとするに過ぎず、去る十月四日偏狹なる兇漢の爲めに悲痛の最後を遂げたる原首相の如き、政策の如何は暫時問はずとするも、平生より人爵に重きを置かず、己が墓石にも勳位を抜きにして唯原敬とのみ記せと、遺言したる、實に天爵を尊ぶの人として轉た追慕の情を禁する能はず。

屈するの勇

會友 岩田博藏

歐州戰亂後改造氣分横溢し出したのは善いとして極端なる個人主義。自負觀念。幅を利かし何でも自己主張をなさざれば人でない様な感想を抱くに至つた事は情ない没分曉な事である。團體的秩序に構はず。社會的平和に望まず。利卍主義の幟下に自己を損傷破滅する事迄も不考に自我主張を遣りだしたといふことは洵に殘念千萬で未來ある國民の心して警しむべき最必要事である。折角獸類より進化して漸く今日の文化生活に這入つたものを逆轉せんとするのは何たる心得違の事である乎。免角不自由なき家庭に育つた子供が學問修業に成功せぬのは刻苦精勵の徳性涵養に其環境が不適當なからである。

喰ひたいものは喰ひ放題。観たいものは観放題と來ては屈する勇氣の養はるゝ筈はない。然も人格の光は鍛錬修養の工夫を外にしては決して握られるものではない。

菜庵丁と正宗の名刀とは同じ鐵材で出來てゐても其鍛錬の度は天地霄壤の差がある。即ち名刀は實に無慮八百四十万七千四十枚も刃金と皮金とを折り重ね打ち叩き鍛へ上げる其努力の結晶で茲に初めて人觸るれば人を斬り馬觸るれば馬を切るを恰も春風を斷つ底の切れ味が出るのである。

人間でも苦心努力折り重ねるを恰も八百四十萬枚に達すれば相當の切れ味も出來て社會に立ちて折れも曲りもしまい偉人傑士にもなり得べき譯である。光輝ある活動の歴史を有する我等長州人は實に二百五十年間此摺鉢の底に屈しゐたりし磅礴の氣力が物理的定律によりて維新時代に爆發し回天の大偉業を成し遂げたのである。

大に飛ばんと欲せば大に屈せざるべからず。飛ぶことを目當として自覺の傘下に大に屈する事の出來ざる腰拔者は俱に大事を語るに足らざるものである。現下の混沌たる情勢に當つて自警の一として余は此屈するの勇を提供するものである。

(終)

## 思潮

### 指月山に登りて

第五學年 宮内 謙吉

大正十年十月十三日夕方、私は只一人指月山に登つた。久しぶりに登るためか初めての様な心地がした。

中途まで行かぬうちに弱い私の心臓は高く鳴りだした。私は只進むばかりである。小鳥の囀るのが聞ゆるではない。道の雜草や、倒れた大木の古びたのも目にどまらぬではない。併し私にはそれを鑑賞する餘裕がない。したくても出來ぬのが私の心だ。これは音に歩むことばかりでなく、讀書にも、話をきくにも、一語一句を味ふことを爲し得ない。早く行詰が知りたい。知りたくなつてくのが常である。私の一番困つてゐるのはこれだ。――私は引返さうかとも思つたが、登つた。敢て勇を鼓したと云ふではない。あの位の山に、努力せねば登れぬかと思へば、心細くもなる。ああ、私はもつと活き／＼したいものだ。

途中誰にも會はず漸く頂に達した。この春だつたか。山

本先生や長州新聞の井上さんや又柴田君等と詩を吟じたあそこで相鳥を望みつゝ、汗を拭ふた、涼しい風が(力強い、そして海面を相當に荒れさせる程度の)快くわたる。火事場ではてりを感ずる氣持で、私は風のはてりを感じた。群れて居た鳥の飛んだので、始めて自分が山の上にいることを覺れた。

私は鉛筆をとつて「これ」を書きはじめた。私は萩市中が見渡したかつた。去る日曜日松本の上野の台で萩の朝景色を見下した私は、こゝから暮れゆく萩が眺めたかつたのだ。が残念なことには、傍の樹の頂に上らぬかぎり、その樹々に邪魔されて片端さへも見られない。

私はそこらを漫歩した。千鳥型の池らしい深い水溜りは陰惨な物語の聞かれさうな感じを與へる。鳥がつゝいたのだらうか、そこそこには黄い銀杏の果が、何か訴る様に轉つてゐる。木の葉が頬を撫でて注意する。

製絲會社の汽笛がなつた様だ。まだ明い、鳥の聲はだんだん数をまじってきた。私は携へた雜誌を開いた。

戦後の吾人の覺悟、成功、孝道、至誠等の表題の下に、學生の憤慨的字句が並べてある。終には和歌もある。

同じ年輩でありながら、斯くも思想が確なものか、私は

心細い。私は、宇宙の大、人生、死、死後の現世と死す身、何々と役にもたぬ空想に耽つてゐる。そうだ空想だ、思考したのではない、何故ならそれに對する私の考へ、いや言葉は（と云つた方が適切だらう）、いつも同じ事を繰り返してゐるのだから。進歩しない。そして苦しむ悶へそれが、私の日常の凡てである。その苦悶が馬鹿らしい事だと自ら嘲笑的氣分にもなつた。何故疑惑するのかわらないまゝに。

先日私は出山花袋歌集を讀んだ、歌集として私が讀み了へたのはこれと、石川碌木選集ばかりだ。すらすらと讀むことが出来て、平凡なことばかりの様だつた。がしかし私には不思議だ。感心する。どうしてこんなに淀みなく歌へるのだらう。それよりも、どうしてこんな事が云へるのだらう。私には歌も詩も、文章も出ない。出せない。是等大自然を見つめたて、月や、星か詩的に、美的に見ゆることか。私には、益々宇宙の不可解と案する悶々の種となる、チツポケナこの地球に、微塵よりも小さいだらう人間が、自然を征服するなんて馬鹿々々しいことではないか。電燈の發明で闇の征服が出来ると思ふなら、その征服した闇を使つて明い晝を、彼の赫然たる太陽を征服して見やうとは思はぬのか。私は學者にも詩

人にもなれぬ。

五六年來、解決のつかぬ問題を握つて私は此の先どうなるだらう、どんな死方をするだらう。自警會員といふも耻しい程、私の學業は、心は、荒んで來た。

しかもこの思ひを離れ去ることが出来ぬのを悲しむ。両親にも師友にも、濟まないことだが私は進歩的人物ではないらしい。

自ら卑むるは怠惰の始なりと或人が手紙を呉れた。感謝する。ただ私が馬の耳であることをどうしやう。

あゝ、私はこのまゝで居たい。世間が知りたくも無い。自殺が許されるなら、なることなら消せ失せたいものだししかしそれは人力の如何ともする事は出来ぬのだ。世間知らず、馬鹿者、阿呆、出来損ひ。と人々は云ふだらう人々よ私は私の心の予盾に迷つてゐる。

私は生きて居る。私の五管は健康だ。活動してゐる。知るまいと思ふても、過去十數年來の経験は、記憶となつて現はれて呉る。思はずには居られない、思へば止め得ない。

何故、いつから、こんな心になつたか。自分に判らぬ。卒業の期が迫つて居るにも拘はらず、受験準備どころか前途に希望をもたぬ私には、現在に精出すさへ難いのだ

### 青年の責務

第五學年 高田 良雄

近頃余は變性男子的婦女子と云ふ語を耳にしたことがある。何と云ふ變性語だらう、日本でも近頃女らしからざる女、換言すれば男勝りを理想とする女の輩出する傾向があるやうだ。覺醒と自稱して婦人運動の従事者中には

此種の傾向を明かに認め得るやうな氣持がある。覺醒其の事は稱すべき事だが滅茶滅茶に新を好み、矢鱈に跳ね返るを覺醒なりと稱して、得意とするものが往々見受けられる。それから男子の中でも此種の不健全なる婦人運動に雷同したりその先走りや勤めたりして嬉しがつてゐる連中も尠からず認めるが、無分別の極と思ふ。それ

では無い、まさに鼓を鳴らして攻むべきである。斯の如き社會だから日本の將來を思はずには居られない。今や婦人は日々に男子を乗り越えやうとしてゐる。男子は女子の尻に敷かれ之に雷同して行く。然し之が何處まで

續いて行く事う知らないが、誠に不自然な状態である。不自然は即ち退歩であり、墮落である、遂に社會は斯くの如くにして腐敗する現代の有様はどうだ。この腐敗の渦中にある人々を自視しながら奮起しない人間は何んを

山路に馴れぬ私は、下りも相當力を盡さねばならなかつた。殊に海端へ出やうとしたため道らしい道がなく、木々蔭をたよりに、汗みどろに馳け下りた處は、海でなく志都岐神社の裏手であつた。

私は平垣な道しか歩き得る力しかなない。しかもその平垣な道でさへ、満足にゆけさうでないのではないか。



云ふ意志の薄弱な人間だらうか。何んど云ふ冷淡な人間だらうか。眞に血は無いか、熱は無いか。國家を思ふ心は無いか。余は今少し現代青年に元氣が欲しいと思ふ。苟も第二の國民として國家を双肩に負ふの士はどうかとも、少し元氣が無くては駄目だ。少々反對者があらうども、攻撃者があらうども、之に辟易するやうな人間では到底つまらない。苟も一事業を企圖する士は三人の味方あれば七人の敵を引き受けて行く考でなければいかぬ西郷南州翁も云ふてゐる。

命もいらす名もいらす官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり此の始末に困る人ならでは艱難を共にし國家の大業は成し得られぬなり。と然り、現代の如き内容よりも外觀に重きを置き、一にも金二つにも金、唯美に粧ふ者のみ貴となす。これでも國家の存亡を引き受けるどころか自己そのものすらも、安全に永く守つて行くことは出来ないのだ。嗚呼世は如何に腐敗しやうとも吾等には大なる義務がある大なる使命がある大なる責任がある。どうしても今の世の中を改善して行かねばならぬ。どうか未だ變性女子的男子の語が世に廣くならないうちに男子の元氣を鼓舞したいものである。

壓ゆる力と跳ね返る力

第五學年 仁 尾 重視  
(大正十年秋季辯論部大會にて)

私はこんな事を聞いた。獨逸の社會主義の恩人は、ビスマークである、と、極端な帝國主義のビスマークが、社會主義の恩人なんて、諸君は、定めし變な感に打たれるだらう、鐵血宰相ビスマークが同國內の社會主義に對する壓迫は非常なものであつた。ビスマークは同主義に對しては、少しの容赦することなく、粉碎を計つたのである。こうなる妙なもので、同主義者等は、之に反抗して益々同主義の宣傳に努力して、今日の盛大を致したわけである。同主義者は、過去を顧みて、ビスマークのあの壓迫が無かつたら、吾主義は、かくまで隆盛になるのではなかつたらう、實に、ビスマークこそは獨逸社會主義の一大恩人だと云つてゐるさうである。之は偽の様な、眞の話。私は此の話を聞いた時に怖れた、善にあれば惡にわれ、壓迫られたら跳ね上るのだ。人間には此の精神は必ずあるのだ。壓迫されたら、そのまま碎ける者も無いでもないが……私はこの壓ゆる力と、それに反抗して、跳ね返る力を考へて見たい。

「コベルニクス」が始めて、地動説を稱えられた時である。ローマ法皇は大變怒つた。そうだらう、今までの法皇の教は地球はチツトしてゐて、天が動く、と云ふのであつたから。法皇は、そんな愚教を稱へて、民を迷はすは、早く改説せよ、と命じた。然し、「コベルニクス」は平氣だつた自分の學説によつて信するところを飽くまで押通したるの頃の法皇と云つたら、素的に權力を振つたもので、一國の皇帝でも、雪の中に立たして謝罪させる位な、飛ぶ鳥も落す、勢があつたものだ。「コベルニクス」は自分の學説を守つて、その法皇と喧嘩するのだ。法皇は、怒つたり、宥めたり、金をやると云つて賤したり、色々したが、駄目だつた。楡々法皇は怒つて、「コベルニクス」を死刑にする事にした。死刑の當日は來た。「コベルニクス」は刑場に出た。法皇は嚴然として云つた「コベルニクス」よ汝只今でも、汝の説を改むれば生命は助けてやる。「コベルニクス」は泰然として云つた。「陛下よ、私が改説致しまして、死を免れましても地球の動くのは止みません。陛下よ、私がこう申して居る間も、地球は絶えず動いて居りまする。」と、間には、是だけの強さがある黄金も、威力も、人の此の力さの前には、何の効力を持たぬ。金力の爲、權力の爲一時は、壓せられるだらう

又、外面は、壓せられた様にも見えるだらう、然しこの心のある力は、決して、決して、壓せられないのだ。「コベルニクス」の肉體は、わけもなく、壓せつけられた、滅びて了つた。然し、彼の學説は死なない。永遠に朽ちない。彼は壓せつけられたのではない。一時はいさ知らず彼は勝つたのだ。永遠に跳ね返つたのだ、一時は壓えつけられた様に見えたのだ。私は人に、この跳ね返る力なるものが有る、と考へる時、愉快でならぬ。そして此の力は、獨逸の社會主義の様に、過つた、方面を利用する場合が、無いでもないが、私は、この力が人間のみに有る有難い法力、だと考へる。そして世の中に絶対と云ふものはない、と云ふが、此の力のみは絶対的だと信する。今私が病氣になるとする、病魔は私を壓えつづける、私は何糞と云つて病魔に反抗する、病魔は私を段々犯す、いくら私が強情でも、體が動けなくなつたら、床に臥せるそれでも、私は何糞と云つて反抗する、遂に私は病に勝つて死ぬ、此の時私はこう考へる。俺は病には負けなかつた。俺の肉體即ち俺の偶像は病に負けたが、實際の俺は、病に勝つたのだ。私がこの跳ね返る力を絶対的だと思つたのは、これを云つたのだ。諸君も御存知の通り、地球の上には十五億萬人の人間が

住んでゐる。色の白いのや、黒いのや、黄色いのや、賢いのや、馬鹿なのや、金持や、貧乏人や、色々な別がある色の白いのが巾を利かす。黄色や黒を壓つける、身分の高いのや、金の多いのが巾を利かす。賤いのや金の無いのを壓はつける、始めのうちは壓はつけられても、黙つてゐるが、余り無理をすると、自覺する、そして、怒る跳ね返る、それで人種の争や、階級の争が出来る。此の人種や、階級の争も要するに壓える力と、跳ね返る力の衝突だ。壓える力を加はるのが是乎、跳ね返る力を起すのが非乎。少し考へて見度い。

地球の上には、十五億萬人の人間が住んでゐる、そしてその十五億萬人は皆ジツとして居らぬ。歩いてゐる。白人は白人の道を、富豪は富豪の道を皆、それそれ前へ前へと進んで行く然し、目的は一つだ。白人も有色人も富豪も貧民も、皆、幸福と云ふ、一つの目標に向つて、ぐんぐん歩いて行く、こう云へば世の中には喧嘩は起らぬ様な氣がする、然し、その中で極端な利己主義な奴が出る。唯己のみその幸福に達すれば、他人はどうでも良いと云つた様な奴がある。そしてその利己主義な奴は勝手な道を歩く、それが関なのだ。その白人なり、富豪なり関か勝手な道をグングン進む。この時にか互同志に何

の關係もなければ、それまでだ、関を勝手に方面に進ませ置く、然し、人間である以上皆連累がある。それら関が勝手に、右に行こうとすれば、他の者もその方に引張られる、始め中はだまつて、引張られてゐるが、余りに慘酷に引張ると、自覺する、そして反抗する、その引さずられてゐるのが無理である程、その壓える力が慘酷な程、跳ね返る力は強く、反抗も過激だ。私は有色人が白色人に反抗するのは尤もと思ふと同様に、貧賤者が権力富豪に反抗の態度を執るを一概に無理とは云へぬ、と思ふ。壓えれば跳ね返るは、人間の性質だ。壓える力が無理な程慘酷な程、跳ね返る力は過激で力強くなるだらう。

白人よ覺めよ、富める者よ、權勢ある者よ、過つては居ないか覺めよ覺めよ、覺めないならば、戦はねばならぬ余儀なく吾々は戦はねばならぬ。そして吾々は勝たねばならぬ、必ず勝つのだ。遠永に跳ね返るのだ。

「汝の右の頬を打つ者あらば左の頬をも打たしめよ」クリスマスはかく教へた。佛陀は、惡魔に追はれた、鳩を助くべく、鼠の肉を惡魔に與へた。悲しい哉、私は來りて我右の頬を打つ者があつたら、私は彼の右の頬を打返さねばならぬ。鳩が惡魔に追はれて來たら、私は、鳩と共に

惡魔と戦はねばならぬ。

今、米國が日本の右の頬を打つ、日本がオーライと左の頬を向ける、米國は氣の毒がつて、謝罪するだらうかいやいや彼は日本の左の頬をも慘酷に打ちのめして、撲り倒して散々踏み躪つて了ふだらう。

今、日本で暴悪なる富豪に對して、佛陀の如き人物出でて貧賤者の犠牲になつたらどうだらう、暴悪なる彼等は直ちにその犠牲に手を出すは勿論、鳩をも取喰ふは必然である、私はキリストにも佛陀にも從えないのだ、やはり相手を撲り、惡魔と戦はねばならぬのだ。

噫、遠い、神の國に……佛陀に……現代は余りに遠いではないか。

諸君よ、諸君は富豪に、權勢家に、あらゆる優者の位置に立つたらう。私はその諸君に告げたい。

虫けらでさへ、神から生を享けたら、無事に生を樂む事が出来る。然るに人間と生れて來て、然も日夜營々と汗して働いて、その日の食事にすら苦む者がある。何故だらう、手を懐にして一夜に數百金の美酒美酒に酔ふ者があるからだ。壓える力が余りに酷なからだ。優者になる諸君よ、考へて見て呉れ、壓はる力が余りに酷ではないか。此の力は必ず、跳ね返る力を生じ、私は世の壓える

力が余りに慘酷な事を知つてゐるだけ、來るべき跳ね返る力の怖しさに戰慄する者である。

私は富や權力の壓える力を破る様に云つた。勿論破るべきである、然し私は富權力そのものを打破せよとは云はぬ。私は次の例を引いて壇を下りる。

理解ある、富や權力は、破るどころか却つて、偉大ならしめる要がある、そしてその効力を充分發揮せしめて、人類の幸福を増進せしむべきである。と信じる。

こゝに二千萬圓の金を持つてゐる。人があるこの二千萬圓を如何に使用すべきかと考へる、二千萬圓の人に頭割りに分ける、一寸考へると中々公平な様で良い方法らしいすると一人前一圓になる、一日五拾錢の生活費として二日間ある。つまり二千萬圓の金は、二日間で消失したわけだ。三日目から二千万人は一錢の金もなく暮すわけになる。

今度は今の二千萬圓で會社を健てることにする、二千万圓と云つたら、余程大きな會社だ、その會社を建てるには大工が要る。左官、石工あらゆる労働者を使用する、そして事業を始めても、重役が要る職工が要る、原料品が要る、するとこの會社の存する限り、永久に夫等の無数の人は仕合せるわけだ。そしてこの會社が繁榮する程

多くの人が助けられるのだ。僅二日で消失する金も使用法が良い爲にこんな生き方なのだ、私は簡單ではあるが、共産とか、極端な平等の不可は、此の話で解決はつくと思ふ。私の云ふ権力や金力の打破を過らない事を願ふ。(終)

暗黒裏より見たる人生

第四學年 藤井勝三

生とは何か死とは何か、嗚呼吾人は疑問の中に生れて疑問の中に死ななければならぬ。過ぎ通つた一生こそこれを疑問の結晶である。見るものも不思議聞くものも不思議行ふ事も不思議である、何の爲に生を求め何の爲に學問し何の爲に財寶を求むるか全く不思議である。遂には死する肉休に送られだけの飾附をしても何も役に立たぬではないか。が此にまた不思議なことには寸陰を惜んで働くものは一生を歡喜の中に送つて天命盡くる時胸に一物の名残なく秋天の如き晴やかな心地で眠るが如く不歸の旅につくかと思へば意憤の爲に我身を持って餘す艱難苦勞遂には無情の世に泣き果て、悲憤懊惱の中に惨な最期をどげるものもあることである。此れは云ふまでもなく心力に依るのである偉大なる心力の所有者は彼の肉体が

雜感

第四學年 木原秀雄

世の中は何もいはずにいよ簾

そのよしあしは人に見ゆすく。

と云ふ歌あり誠に然り。人は皆各自簾箔の中に在りと思ひ、その行を慎むべし簾箔。の外には人ありてその一舉手一投足とも監視す假令善行をなすとも殊更に之を口に矜りて、人に示さんとする事あるべからず。悪行をなし荷も人知らずと思ふべからず誇らずとも人之を知り隠すとも亦人之を知る。秘密にして永久に露れずといふ事なし。悪事は千里に傳るの譬あり。そを時と遅速あるの

み。

心の鏡

心をば鏡にうつす者あらば

さぞや姿の見にくかるらん

と云ふ歌あり。身には錦繡を纏ひ、家に百萬の富を擁し金殿玉樓に住む徒輩にしてその心をば鏡にうつすことあらば如何に、悉く一点の曇なきこと能はず、その醜なること假令へば灌渠の濁水の如きものあらん。その身陋巷に在りて然も一簞の食、一瓢の飲に甘んずるものと雖も心を鏡にうつすことあらばその廉なること滾々と湧出せる秋期の靈泉の如きものあるべし。嗚呼然れどもこの靈鏡なき爲め善人の奸佞の徒に征せられ魅せらるるの多きを如何にせん。唯か心の鏡を有するものなきか。純潔を以て誇となす、青年に於てはこの鏡に對して愧づべきことなきを期せざるべからず。

樂

樂といふものを求むる心こそ

身を苦しむるかたきとはなれ。

至言なり。然れどもこは眞の樂にてはあらざるべし。樂

優の字

を物質的方面に得んとする者に於てはかゝる憂あらんも山下氏の所謂「勤勞則道徳」の方針に基くものにはかゝる憂は毫もあらざるべし。假令身に些細の苦を感ずると雖もその苦を化して樂となし體ては體軀を構成する基礎とはなるべし。されば反りて之を味方とはなすなり。然れども少しにても投機的に富を得んとするもの、一粒萬粒を夢みるものは即ち身を苦しむるの敵とはなるなり。富むとも苦なき能はず、貧なりと雖も樂なしとせず、至上の幸福は心の平和にして身の樂に優る。人は皆その志にあらば、その生涯を照り輝くものとなすを得ソロモン曰く「宴樂を好む者は貧人となり酒と膏とを好むものは富をいたさず」と物質的の樂を欲すべからず。

情は人の爲ならず

孤兒院の數名門に立ちて歌を唱へしものの中に右の一句

ありき。路傍に坐して惠與を受けんとする者門頭に立ちて施與を得んとする者、之皆眞實の不幸福不具者とのみ云ふべからず。勿論眞實のものも多からんも故に身に不具を装ひ口に難澁を唱ふるものも少しとせず。人或は曰く斯る者に惠投するは反りて怠惰に終らしめ不親切の行爲なりと、然ども一面より考ふれば一々委しくその身分素性を判別して施すは容易の業にてはあらざるべし。今路傍の難澁者に一錢を施すことあり。その眞の不幸福なるか或は虚構の不具者たるかは知らずと雖も惠與以てその愁眉に一点の喜悅を生ずるを見れば、施與者自ら心中快なるを覺ゆべし。されば對者の身分素性を極端に論ずべからず、人には天賦の慈善あり、一時の施しを以て對者の喜ぶを見れば即意足る情は人の爲めならずの言自が心を満足せしむるに於て眞に然り。

青年と海水浴着

今夏海水浴を志すに海水浴着を纏へる青年の游泳せるを見て誠に感慨にたゆまず彼等は何が故に浴着せるや、衛生上害ありなど唱ふるは婦女女子の事なり。苟も元氣潑刺たる青年に於てかゝる言あるべからず。然に浴着を纏へる何人ぞやその体軀の色の黒くなるを嫌忌するが爲めか、

或はその体裁の良ならんことを欲するが爲めか。

そも／＼海水浴たるや、何の爲に之をなす今や彼の魚肉を保存するに鹽を用ふるが如く人の墮落の恐あるものに肉體にも精神にも共に鹽を施してその腐敗を防ぐにあり海にはその大効力ある鹽を無盡に藏するなり。然るに何んぞや輕佻浮華の氣を生じ、娛樂的に之を畜すは實に本來の趣意を忘却し、剩へこの大靈藥を濫費するの甚しきものなり。色の黒くなるを嫌忌し体裁を飾らんとするが如き意の存する丈眞の海水浴にはあらず。將來國家を擔ひて立つ青年にかゝる氣風あるは、寒心の極なり。

不倒翁

宮内謙吉

不倒翁。汝一個の玩具に過ぎず。實に一個の張子の玩具なり。押せども突けども、高きより落すも、更に苦痛を訴へず、面部に些少の回みを示すのみにてコクリと起き上る。起きあがり小法師の存する所以。小兒汝を弄してその臥せざるを怒り、一撃汝が腹背に加ふれば、臥せざるも道理、下部に土を含み、頭部は即ち空虚なり。三度云ふ。汝一個の玩具に過ぎず。汝を造りし者は人なれども人は汝に學ぶこと一再ならず。淺からず。千萬の毀譽

褒貶にあひて屈せず怠らざるは、名利に淡き汝が頭部の虚なるに見たり。終始一貫、心を大宇宙の大自覺に根ざし、風雪に折られざる柳竹の如く、堅き信念に泰然たるは汝が下部の重きに見たり。人々よ逆上する勿れ。本末を認る勿れ。大海は清濁併せのみて自ら汚れず。氣海丹田に一心を藏めて手足意の如く動かしめよ。社會の思想は如何になりゆくとも、信念不動の大我を體得せば、何ぞ恐るゝものあらむやと、不言裡に悟らしめ、鞭撻する者は、思ひきや一個の玩具不倒翁ならむとは。翁とは云へども七才の頃弄せしも、二十才の今日見る汝も、面部あくまで力を含み、總身常に赤々と意氣に燃へたり。五たび吾は叫ぶ、汝一個の玩具にすぎず。しかもよく吾等に處世の哲理を教ふ。あゝ我が古き友よ。我が師よ。汝不倒翁。淺薄の墨に汚せしを許せ。

偶感

△駄目だ。黙して居ればよかつた。言ふたがなんだ。聴かれた所でどうしたでもないじやあないか。何故慎めないのだらう。何故、判つて居ながらあんなことをするのだらう。あゝ私は馬鹿だ。馬鹿と書くこれも人に讀まれると思へば愚な事だが。

△文章も辯舌も、碌でもない癖に。そうだが根本の頭が出

來てぬ癖に、人並みでないのに。何といふ事だらう。私のすることはこれでもないのか。きつと私は横道へうれてゐるのだ。本道へ歸らなくてはならぬ。本道とは？

△あゝそれも明かに判らない。

△中學校も今年きりだ。今になつて本氣に勉強するのであつたと悔んだ所で何んだらう。私は學問して馬鹿さ加減を増したのじやないか。勿論學問の方法を誤つて居たのだらう。あゝ學問は人間を作るものではなかつた。人間の行爲はどうだらう。ごつちがどうなればいゝのか。

△して見ると私には、ろの大本が抜けて居るのだ。私の本道は近くにあるかも知れぬが、暗くて判らぬ。第一、何がこの闇をなして居るかさ判然せぬ。

△ペンも棄てやう。口も閉ぢやう。皆な柄にない事だ。裸一貫、是の手、是の足この額に汗して働くのだ。

△何だ私は今日まで、遊び半分に暮して居た氣がしてなぬ。確にそうなのだ。私は働かう。吾でない。筆でない。手で足で。眞面目な生活をやう。小さくとも。肥料にもならぬ事を考へるよりは、人の爲にもなるだらう意義ある生存とは云へまいか。私はそう思ひたい。この

點に於て、今迄の學問は邪魔はしないだらう。いや、私  
はこれらを活さねばならぬ。それは私の將來に係るのだ  
今迄の讀書やその他を活きたものにし、私の一日を意義  
あるものに入らしいものにするのは、これからの奮闘に  
あるのだ。私は自重しなくてはならぬ。

△私の口は必要の爲に動かさなかつた。泣言でなければ恨  
み、女々しい繰言。そして下卑た食慾のため私は老人で  
も女でもない。熱い熱い血に燃ゆる若者ではないか。

△今日までの一言一行。それは感謝の言葉、眞實の行で  
あつたか。

△それにしても私は世間を知らなすぎた。考へて見な  
かつた。徒らに歩んで居た。空想に耽りすぎた。雷同し  
た。妄動した。それで私の生れた甲斐があるだらうか。

△私は正道につかねばならぬ。

△大正十年十一月十九日、辯論會で何と云つたか。頭も  
尾もない。十八分の大切な時間を徒消したのではないか  
ただ十八分ではない。或はそれは百五十時間もの時間と  
も云へる。

△嘗て「甕より出でよ」といふ(本誌第一號にも一寸誌し  
た)ことを云つたくせに、自身はまだ瓶の底にこびりつ  
いて居るのではないか。打ち破れ、打ち碎け、私は廣い

世間を見ねばならぬ。(その時私は更に、私が小さいもの  
であることを知るだらうが)そして本道を辿らねばなら  
ぬ。

△學問がその時正しく役立つて欲しいものだ。いやさつ  
と役立てねばならぬ。二十年の過去が無意味になるでは  
ないか。あゝ私は過去に責められる。

△もう何も考へない。云ひもすまい。良心の示すがま  
に進軍しやう。躊躇せず突進しやう。そして宮内謙吉  
の道を開拓しやう。赫かさう。若き者の誇りだ。働け働  
け、血と肉とに。靈は自から生きてくるのだ。

△大正十一年の犬の聲が私の行途を知らしてゐる。酉は  
後から祝福して呉れる。進め進め。(一九二二、一一、一  
九夜)。

ヘンの集

△日は明治天皇祭であつた。向ひの寺では、十周年法要  
をするとの札を立てた。神社で十年祭を行はれるのは聞  
いて居たが寺で行はれるのは、こゝらでは珍しいことだ  
さてお寺への参詣はなかくあつた。神社では説教がな  
いからなのか、参詣者は尠少であるのが常だ、所謂祭禮  
騒ぎの出来る時でなくては、寺院程の参詣者はないのだ

あふぞよと一通行つて來たやうな、有難氣な、お話を聞  
かされては、極樂淨土へ行く事が人間本來の望みなのか  
地獄が如何に恐しいかも考へる間もなく、唯一心に歸依  
申候也となる。學問と宗教はどんな風なものか、物理化  
學は經文の文句とどれ程隔るか。

△日本の家の大抵は神佛が祭つてゐる、祭ると云へば神  
様ばかりの様だが、とにかく老人は毎朝夕その前に禮拜  
する。自分達も老人になつたら、あんな事をしなれば  
なるまいか。自分は神佛を信仰する心が出るだらうか、  
あんな風に祭壇を作つて前に跪坐しなければならぬの  
か。出来るたらうか。信仰は青年には無用なのか。何故  
青年は禮拜することを好まぬのか。青年と宗教との關係  
奈何、宇宙の原則は……云々しよると、今頃の坊主

頭連の言ふ事が徹臭い氣もする。もつと現代思想を貫い  
た説教法、極樂淨土地獄等の言語の改正は出来まいか。  
△宗教について。國體について。哲學も、現代思想も、  
深く、否淺くも知らぬ癖に、更に研究しようともせず  
斯の如き、文句を並べると、彼方此方から痛罵されるに  
違ひない。併し私は何とも云へない。ただ自分が斯の如  
く淺い思想だと人に知られるばかり。

△儒教、佛教、基督教、道學、神道更に細説すればこれ程

そこで考へた。考へさせられた。佛と云ひ、神と云ふ。  
どれ程の相違があるだらうかと。助けて下さるれ方は佛  
様ばかりか。神は、日本の神は、我等の遠き祖先である  
ばかりか。いや同じく神といふが、宗教の教といふ字を  
つける、大社教、天理教、黒住教、近くは大本教の類  
等、その中には救ふて下さるれ方もあるらしい。唯、拜  
禮して居れば、祈らずとも、救ひを求めずとも、よいの  
もあるらしい。それかと思ふと泰西人の神は我等を生み  
かつ我等に幸福を賜ふものであるさうな。

△我等を生みかつ我等に幸福を賜ふと云へば我國の神教  
だつて同じ意味ではないか、すると基督教と我が神教と  
の間隔はどうだらう。——私の愚な腦は苦しませる  
を得なくなつた。一鉢どうしたものだらう。

△人間は二様の生活をしては居ないか。神佛を信仰して  
生活するものと、凡てを科學的に窮めやうとする生活と  
——用語の不徹底なのが不満だが仕方がある。——靈

的、物質的とありさうだ神も。佛もあるものでない、  
皆人間が氣息めの云ひ草である抑宇宙は云々、と云はれ  
て、何もかも人間の方だ、偉大なる人力よと自惚れて居  
るを一方では、そんな事を云ふと罰があたる。念佛さへ  
申せば極樂淨土へ參られる。虚偽を言ふと地獄の責苦に

あるか知れぬらしいが、我等はその何れに據るが最も正しいか。それとも、各粹を抜いて、一道を拓いて進むか。修養の道は一体どんなものだらう。

△話は變るが我等は何時迄泰西人の意の儘になつて居るのか。所謂白人の跳梁を何時迄見逃しにするのか。一体彼等の威張つて居る底には何があるのか。所謂文明の餘澤なる諸種機械の發明は。餘澤が却つて本宅になつた観はしないか。先日山下信義法學士の話の中に生存の價値實現に有力でないものは機械化する。スイツチにしてしまふ」とあつたが、飯焚も、水汲も、歩く事も、何もかも機械に委ねて残つた人間の精神は果して如何なる人類生存の價値を發揮するだらう。機械を驅使する精神はこれ亦機械的になる虞はないか。人類生存の價値實現といふ語の意味が私には徹底しなくなつた。一体なせ私の腦はこんな事に苦しむのだらう馬鹿らしい。

△話が横へそれが東洋人も過去に偉大なる人物をもつて居る。尠ども、西洋文明よりは上位なサムシングがあつたらしい感じがある。日本人ばかりじゃない。東洋各處が西洋の眞似をしてゐるではなるか。佛教だつて、もつと深い或者を示しはしまいか。我等は大乘小乗の區別なしに、はやく、それが知りたくなつた。

△數理の奇談といふ書によると、二百餘年の昔に於て、無窮小數、即ち今日の微分積分學に外ならぬものが、關孝和といふ本邦上毛の人によつて發明されて居たといふことだ。歐洲に於てはニュートン、ライブニッツ等が十七世紀の終り頃に於て發明した。關先生は寛永十九年西曆一六四二年の生である。確に吾日本人の誇とすべき所である。思ふて残念でならぬのは、封建割據の風習と徳川幕府の鎖國主義が歐洲學者との智識交換の自由を妨げたことである。

△徳川幕府を語れば、幕末の紛擾を想像する。公卿、幕府、諸藩の志士。その對照、その思想、その困憊、その慨歎、それは又、現代の日本を反射する。華府會議と日本。あ、次第に吾等の時代は近づかんとして居る。

△すべてのものは伸びんことを欲する、又すべてのものは何もかを征服せんことを欲する、——それがいつはらざる自然の本能である。貧乏人が富豪になる望み、三軍を叱咤した將軍の得意、共にそれである。しかして欲するものを得、あるものを征服して、目的を成就したるものは、すでに墮落の第一歩にあることを知らねばならぬ。(小説) 余思ふ。人間が宇宙の秘密を全部を知り得る。

〔雜誌時代〕

時ありとして、その時の人間の感想はどんなだらう。絶望の極死を欲するだらう。天地を俯仰して後悔する事だらう。そこで私は所謂成功といふ語を奇異に思ふ、立身出世して早く成功したいといふ。彼等のいふ成功の意味は何か。人間の欲望は彌々つのるものである。死んだつて成功の域に達し得たと自身に思ふ奴はあるまい。成功成功、吾等は只だ其の域に至る眞摯なる努力を尊むのみだ。——(一九二一、一〇、二三)

私の思想變遷推移の告白

卒業生 柴 田 美 稻

私は記憶します。「個體發生はその経路に於て系統發生を繰返す」とは嘗つて生物學に於て教へられた所でありました。私はこの事を考へます度毎に我々の思想の變遷についてこの事が言はれ得ることを認めずには居られませぬ。振り返つて私の過去に於て辿つて來た驢げを道程を思ふ時、私はそこに大体に於て近世思想發達に似通つて居るものゝ多いのに驚きます。併し勿論私の頭は未だに現代思想の最も新しき落着にまでには餘に大きな距たりがありますし、況して私の道程に於て己自身の發見といふ事も極めて最近の事實で従つてそれ以前は別の思想變

遷の経路も極めて自我の匂の稀薄なものに過ぎませぬから彼と此とを比較する事には多少の無理もありませう。併し全体として見る時そこに面白い類似の點が見出されるところを思ひます。

獨乙の哲學者ヘーケンは人間思想變遷と正反合の原理で説明しました。即ち茲に一の思想傾向が起ります。これを今正とします。やがてそれと全く相反した傾向がこれに對抗して起り遂にこれに打克ちます。これは反であり、また、すると次第々々に正と反とは調和一致して一の傾向を生じこれを合と呼びます。かく正反合を順次に繰返して思想は進歩すると説くのであります。概観しますと眞にその通であります。近代思想の進展の経過がこの正反合の原理によれることは己に人の説く所ですが私自身にも之を経験した事をばんやりと乍ら感じ得るのであります。「史家は西洋文明に於ける近代思想の起源を文藝復興期に求めて居ます。これは申すまでもなく從來の壓制的な宗教の權威に反抗して立つた人々の自覺の叫び聲でありませう。知識解放の叫び聲でありませう。動機は全く違ひますけれどもこのルチサンスが當時の民心に齎したと全様な結果は私に於ては初期數ヶ年の教育が持參して居ります。一方は今まで甚しい抑壓の下にあつた故

に一方は未だ教育を受くるの素養のできぬためかく事情は異つて居たが一たびその蒙を啓かる、や始めて明るい世界に出て来た様な氣持になつた事に變りはないと思ひます。六七年の初等教育は生得大人振る事の好きだつた私を何う一通り物が分つたかの様な虚妄に陥れました徒に外形を重んじたり因襲を尊んだり遂には物事をその貧弱な知によつて律したりする様な大それた考を持つ様になつたのでした。これは小學校の先生や両親によつてその蒙を啓發して載いたと全時に亦生じた缺陷であつたのでせう。丁度ルネサンスに依つて智識の自由を得た人々がその智識に捉へられ徒に古きに倣ひ外形を尙び一方に於て擬古主義の典麗な文藝を出した側に於てウイタルな力に缺け内容の貧弱さを暴露するに至つた道程に似た所がないでもありません。この擬古主義に對して歐州で起つた運動は浪漫主義であります。こは己に知の自由を得た人々が更に情の自由を求めその溢るゝ如き生氣を發揮せんとして起つたのであります。既に自覺の水口を切つて落した人間が止むに止まれず立ち到つた運動であります。形式よりも内容に知よりも情にと只管天真の流露に任せんとするのがこの主義の本領でありませう。私も中學入學以來は余程氣分が變つて參りました。氣持もの

んびりしをすし自然美に對する愛着人情美に對する感激も益々著しくなつて參りました。英雄の崇拜熱神佛に對する敬虔(但し信仰は有し) (まませんでした) 神秘に對する驚異これは中學生活の殆んど全部を通じての私の心の状態でした。併しその一面は亦感傷的に過ぎ空想誇大に耽ける極めて現實性に乏しい缺陷に陥つてゐたのでした。併しこんな心の状態がどうして何時まで續きませう私の心に叛逆者は表れましたそれは彼の自然主義的思想であつたのです。

歐州では科學思想の隆盛普及のため浪漫主義に對抗して自然主義の勃興を見るに至りました。この自然なる語は知識の自然、事實の自然、客觀の自然しかもそれが近く發達した科學を透したる現實の自然を意味することは申す迄もありません。今私は自然主義の事を述べようとは思ひません。唯私のかゝる心の傾向に就いて申したいのです。私はその頃何等自然主義なる抽象的な考を有して居た譯ではありませんが生理物理化學と次第に教はつて參りますと漸次に物の見方考へ方が違つて參りました勿論それには色々な他の原因もありませう。生理的の變化とかろろと擡頭するエゴイズムとかにも答はありませう。この物事に對する見解の違つて来たことは遂に

懷疑を生み始めました。今まで何の氣なしに従つて来た事に一々不審が起り出ししました。そして疑へる丈疑ひました(今でも疑の癖) 遂には神(今とて客觀的實在として) (は止みません) の神は認めて居ませんを認めず道德その或部分に疑を抱き眞の愛といふものゝ存在さへ疑はれて仕方がありませんでした。これ皆私の唯物論過信の爲す所たつたのです。時々私の耳邊にこんな事を聞く事がありました「れ前か唯物論にかぶれてゐるのはか前の勝手な行爲に都合よき辨明を與へんとするエゴイズムチックな動機からではないか」と。そこに多少のエゴの分子が合つてゐたかも知りません。併し私には理性的に承認の出來ぬ事には信をおく事が出来なないのです。こんな時期が卒業前後から半ケ年許り續きました。近頃漸くその非が悟られました。かゝる誤れる思想はどうして起つたのでせう。他にも原因はありませうが自然科學に對する信念の置方がすぎたのが主なる原因といはるべきでありませう。一時私は自然科學が或る假定の上に立つて居るものである事を忘れてこれに絶体的信念を置いた時代がありました。私は決して恩深き舊師に對して不平を述べたものではありませませんが自然科學に對する吾人の態度なるものを一言舊師が御示し下さつたらかくまで誤れる唯物論に落ちさせなんだらうにと考へます。即ち

自然科學が決して絶対の眞でなく唯比較的矛盾の少ない宇宙現象の説明法の一であるといふことさへ御示し下さつて居たならばと思ひます。この事は若し未だこの経路をお踏みにならぬ方はどうか御注意下さらんことを失敗者の經驗より得たるアドバイスとして差上げたのであります。歐州大亂後世界の思潮は唯物物の界を出で、高き神秘の境に赴かんとし新浪漫主義ともいふべき思想の波はひた／＼と極東の島帝國の岸にも押寄せまわります。多くの青年が皆内面的に充實した生活に入るべく修養してゐることは誠に頼しい事でありませう。私も近頃幸にある暗示によりあの恐しい唯物物の境から逃れて懐しい尊い無限者の光を臆げ乍ら認める事が出来る様になりました。宇宙の御母の胸の温みを微か乍らも感ずるを得る様になりました。併し未だその詳細をこゝにて述べべきではない事を知りて私は筆を擱かんとします。併し凡人の悲しさ信せんとして信じ得ぬ悲しさ、過去の自然主義的幻影は常に私の心を引き返さうとたくらんでゐるのをどうしませう。私はしみじみ身の至らなさを悲みます。最後に若し私如きの後を進み來らるゝ諸君あらば諸君よ私をして老婆心迄に私の不肖不肖を顧みず日は

して下さい。「個體發生は系統發生を繰返す」諸君も必ずやこれに似た経路を辿られる事であらうと思ふ又現に辿られたる方もあらうと思ふ。私は思ふ決して人間のさうやかな力を以てこの不可抗の必然に逆らうてはならぬ。それが唯物思想であらうと何であらうと諸君が真にある偉大なる要求に飢渴するまで苦戦奮闘しなさい。そして渴に堪へなくなつた時はその時目を轉じて仰いで彼の蒼穹をお望みなさい俯して彼の蒼冥にお臨みなさい。必ずや大自然大なる無限者はその廣大無邊の胸に温き抱擁を惜しまないでありませうと

これは決して偽らぬ私の思想變遷の告白であります。文に順序なく意味不明の点はお推量下さつて私の意のある所をお汲み下されば幸甚と存じます

(大正二〇二一、二〇)

### 雜 錄

#### 靈地に立つて松陰先生を懐ふ

第五學年 仁尾重 視

某月某日

午後松本川端なる友人を訪ひ、用談を了へて歸宅せんとす。忽ち興湧きて雨に霞む鶴城下の景を賞でんとて東光寺を目指しぬ。松本の新橋漸くならんとす、堤上の櫻名残りなく散りて流水春を浮べて去らんとし、新緑の初夏の景は目のあたりに展開せむとす。東光寺のほとり山靜に水清きとこる時鳥を聞く遠きに非ざるべし。常は水なき小川の今日は凄じき勢奔馬の如くなるを渡り、河原と云ふを過ぎて行けば道愈狭く道の兩側より蔽ひかかれる山吹櫻など茂りたり。このあたり沼田ヶ原とぞ謂ふなるべし。山吹の黄金色せるが雨を浴みて又なく艶に眺めらる。吾今まで兼好師の「山吹の清げなる」云々をうべなひ難く思ひしも、今にして初めて清げなる山吹を見ぬ黄金色も濃淡の加減にては中々捨て難き情趣のあるものかな。

東光寺の山門に到りぬ、壯大なる建築かな風雨幾星霜樓門既に朽ちたり。山は日曜の午後を樂める村の童にや數名山門に雨宿りせるあり、吾道を新道と云へるに執り松陰社前に出でんとす行くこと數十歩左方に道路の改修さるるに會ふ、松陰先生出生地團子岩に通するなりと赤泥の坂路を攀ちて靈地に到りぬ田床妙高二山の懷に抱かれたる地數十歩に過ぎ麥青々伸びたり。

靈地に立つて四顧し、沈思す感胸に雲の如く涌き低徊去ること能はず。萩城下は霧の如く煙る雨の底深く眠りて見えわかず。密雲指月の峰を掠めて瀕りに、北に飛ぶ吾心は徐に往古に向つて飛びぬ、妙高田床の山靈の氣は凝りて松陰先生は生れぬ、時正に天保元年なり梅檀は二葉にして香しく先生齡句ならずして、家學教授見習として明倫館に登りぬ、時に内外風雲益々急なり。十一年英船長崎に来るあり、同十五年露艦松前を伺ふ、二百余年大平の夢は忽ちにして黒船に破られぬ。國內は鼎沸せり宜いかな時や、時勢は英傑を生むと先生は正しく時勢の要求に生じたる一大英傑兒たりしなり

嘉永三年先生廿一才なり、九州に遊ぶ、月を歴すること四その間、小倉、佐賀、大村、長崎、平戸、天草、島原、熊本、柳川、久留米を経平戸に留まること五十余日山鹿萬介に家學を學び又新譯珍書を讀みぬ、長崎に於ては譯官某に就きて支那語を學び熊本に於て宮部鼎藏に、佐賀に於ては草場佩川、武富圮南等に交りその他到るところに文武知名の士を訪ひ、又海外の事情を得る所多し此の行先生の生涯に深甚なる潤歩を與へぬ。

翌年先生山鹿流の兵學皆傳を受け同五年奥州を遊歴し三戸侯の偉業に感激す此の年の五月先生江戸より歸萩謹

慎命を待ちしなり。十二月亡邸の罪を以て籍を削り祿を褫はる。是先生が身世齟齬の第一にして先生の猛氣の溢れたる劈頭の事件なり、此の行によりて先生が尊王の大義、國體の觀念護國の精神は心の底深く一層根強くされしなり。

嘉永六年正月先生萩を發し、海路四國に渡り大阪に達し、畿内伊賀伊勢中仙道を経て六月一日江戸に入る此行も亦沿道の諸名士を訪問し、見聞得る所頗る多し先生が明敏なる頭腦と熱烈火の如き情は名士と談り、時事を論ずる毎に益々白熱化されしなり、恰もよし七月露艦二隻長崎に来り、樺太境界確定を求む九月佐久間象山等と謀りて竊に露艦に塔乗せんと決し、十三日竹院上人を鎌倉に訪十八日江戸を發し京都を経て熊本に到る、十月二十七日長崎に到れば露艦去りて無し、噫先生の遺憾想ふべし。

安政元年先生二十五歳なり、正月米使ベルリ軍艦四隻汽船三隻を師めて江戸羽根田に入り、去て伊豆下田に泊す。三月五日先生金子重輔と江戸を發し米艦を逐ふて下田に至り、二十七日夜米艦に赴きたるも、遂に海外遊學の志を達する能はず、二十八日恨を吞んで、自首して縛に就く、九月十八日、先生の罪案定まりて、金子重輔と



藩に鋼せらる。十月廿四日、野山の獄に下る。翌安政二年重輔獄中に死す、三年七月、塾居中許可を得て、松下村塾を開く、これ先生の偉業中特筆すべきものなり。期間は安政五年十二月に到る、二年半に過ぎず、所は、萩城東郊なる、杉氏邸内の八畳の矮屋にして、其の特に増築したるものも、別に十畳半の一室を加へたるに過ぎずされど先生は、至誠なりき、弟子又至誠なりき、熱と熱の接するところ火花は散りぬ、先生その名義とするとこゝろは、山鹿流軍學なりき、されど實は然らず。先生は改革家ありき、弟子に教ふるところは、改革の精神なりきその講ずるところは、改革の偉業なりき。先生は時の政府より過激視されたり。

倒幕は先生の主義なり、されど先生の破壊には、必ず建設が伴へり。先生の破壊は即建設なり、進化なり、向上なり、何の不可ある。先生は時の大勢を諄々諸生に説きぬ。大義名分を説きぬ。堂は狭し、諸生は指を屈するに足らず。されど先生が至誠何んぞ果を結ばざる、思へ、此の二年半の歳月が、未來の日本の歴史に、千波萬濤の激起点をなせるを。

安政五年、間部詮勝要撃の計畫全く齟齬せり。十一月過激の罪を以て家に嚴囚せらる。翌六年五月二十五日先

一の谷を過ぎて、かく戯れぬ、死に面して悠々たる襟度想ふべし。その他途上或は詩を詠じ、文天祥正氣の歌に和し、江戸に着す、七月九日江戸町奉行所に送られぬ、罪科定まらず、十月に至る。此の間友人に書を送りて曰く「艱難雖不辭、安樂亦自好に御座候」と、先生が獄中の有様躍如たり。

先生は其身は獄中に安座せるも、其心は一日も平靜なる能はざりしなり。微に傳はる、世の事件は益々紛糾せり。その友人に向ひて「天下の事追々面白く成る也、勿挫勿折、神州必不滅也」と云ひ贈れり。獄中にて先生は同志の友を得て、天下の事件は略先生の耳に入しなり。悲しき日は來りぬ、十月十六日、鞠問全く畢り、奉行は先生を流罪に當るとなし、案を具へて之を老中に致す。大老井伊直弼「流」の字を鈎して「死」字と作す

先生亦之を漏聞きて十月二十日永訣の書を作り、之を父兄に贈れり。字々熱字々血、讀む者をして、その孝心に泣かしめ、その勇猛心に感奮せしめずんば止まず。時の和歌に

親思ふ心にまさる親心

けふの音つれ何とさくらん

安政六年十月二十七日午前十時。熱烈火の如き革新の大

生公の筋より江戸檻致の命を聞く、先生毫も愕くところなし。泰然として常色を變せず、入江兄弟に書を與へ巳が心中を明にし、門人某をして己が肖像を描かしめ、自ら贊文を書く、人口に膾炙せる「三分出廬」の文これなりこれに依て先生が一生の抱負と、特性は見るに充分なるべし、五月二十六日、溟濛たる梅雨を冒して檻與萩城を發しぬ。

鳴かすあらば誰かは知らん郭公

さみだれ暗く降り續く夜は

先生は實に死を決して行きぬ當然死の來るを知られしなり

かへらじと思ひさだめし旅なれば

一しはぬるる涙松かな

誰か英傑に涙なしと云ふ、懐郷の念焉んぞ、英傑も婦女子と異なるあらんや

別れつゝ、又も淡路の島そとは

知らてや人の餘所に過らん

白砂青松須磨の濱を過ぎて、婆娑たる松の樹間に淡路島を眺めて懷を述べぬ。

一の谷討死とげし壯士を

起して旅のみらつれにせん

精神は、長天に歸しぬ。噫、

かくすればかくなるものと知りながら

やむに止まれぬ大和魂

と。先生の大精神茲にあり、かくなるものと知りて悔いざる先生が維新の改革健兒たる所以なるなり。偉なる哉至誠の人や。偉なる哉熱血の兒や、想ふて先生の事に到れば、涙は滂沱として頬を流れ、血潮の高熱を覺ゆるなり

### 幕末に於ける武士の風俗

第五學年 井原 師 郎

實は私が、幕末に於ける武士の風俗などの御話を、この會で致しますのは少し關係が遠くて、可笑やうでありませが、皆さんは、この會に於て常に有益なる御馳走を、御受けになりますから、偶には芋の煮轉も却つて、御馳走かと存じまして、こんな題を出しました。幕末の江戸の武士の風俗といふても、漠然としてなかなか易く述べること出来ませんで、私の今此處に述べますのは武士即ち士族の二種あることと、衣服と家庭に於ける生活及び風俗習慣を述べやうと存じます。不十分の眞に愛讀者諸兄の御容赦を願ひます。さて幕末と云ひましても最も

明治に近い安政より萬延文久元治慶應であります。この間は十五年間でありませぬ。この間の變遷は随分ひどくて殆んど其の形式もないものが多くあります。其の當時江戸に於ては、所謂講武所風の出立で、劍術の道具を肩にして、竹子笠を持つて揃の袴を穿いて居る様、刀は白柄に朱鞘でありましていかめしくあります。又役人風がすりまして、彼等は本多頭に黒八丈の襟黄八丈の流し、羽織は黒縮緬の五紋或は三紋或一紋の丸羽織突袖をいたして、極短い大小を前の方へ差して雪駄をはいて歩いて居ります。これ等の形は、今日は芝居の外には殆んど見かけません。でこの時代の武士といふ者諸家はさて置きまして江戸に居ります徳川家の臣下旗本八萬騎御家人何十万とか申しましたそれ等の人々を指すのであります。此れには目見以上と目見以下とが、ございまして、前の方は第一が大御番、其次が御番、即ち御小姓と御所院組、其次が、新御番、其次が小十人組等とございます。又目見以下になりますと諸組の與力同心、御走等とございます。これがまわ一體の武士であります。處で其番士の中から才能ある者が取立られて役人になる。即ち御勘定方又裁判の一つでも出来る者は評定所留所役に出

るそれから御目付方、この目付方の中にも御用所と當番と區別されて居ります。その御用所即ち何か一つの御用掛になりまして、着流の形で殿中に出ます。それを又旅形とも申します。其の譯はといへば、何處其處へ出役を命する政府から命しますと、其の日からも旅行の格となつて形も旅となる其の頃の武士の旅行を芝居では華やかに光つた踏込みの袴を穿きまして尻へ菱形の火打の入つた緞子のなぶさ羽織を着て居りますが、あれは番士の風で役人の旅形といふものは着流であります。其の着流での形で登城致すが大變自分の名譽といふので大得意であります、それに引きかへ同じ役人でも繼社ついで連中之はよく芝居でも致します服装で彼等は前の着流に一着を輸して居た、所がこの中の利ける役人の向ふを張り得たのは講武所であります。この講武所なるものは當時非常な勢力があつた、殆んど武士たるものの代表者になつて居りました。而して双刀差す者にして講武所に出ませんものは殆んど武士の資格がない位に思はれたので此所へ出るは武士の花とまで謳はれた。扱てかくまでにあの勢力を、講武所なるものが得た動機といふものは次の通りであります。元祿時の華者柔弱な風が残つて居つた幕末に至り、外國との交渉起つたのであります。然るにこの

一大事にさしあつて、幕府では頼むべきお旗本御家人なる者は天明の餘風を引いた文化文政の人々茶屋小屋に入りて、喰へ揚技に女の膝を枕に爪弾てもしようといふことを本務とする連中はかりこんな者を相手にして戦争は出来ぬ。そこで安政三年とやらに講武所が出来まして弓馬槍劍銃をやらしたものであります。前にも申しました、面籠手と竹刀とをかたに掛けて竹子笠をかぶつて、歩く、修行人の形が表はれました。是今まで人に野暮とか不意氣とか馬鹿にされて、重い面籠手を當てて竹刀や槍でつかたり打れたり、痛い思ひをして居りましたが忽ち武士らしき武士と言はれて、急に芽をはき出したのでございます。そして師範側で一番よいのが師範役、其次が教授方、其次が世話心得、其次が泊りといふのが出来ました。此等の役々となるは非常な名譽な者。殊に目見以上では奥詰といふのになつて將軍家の親衛となり。其れから不時の御小姓とか、御小納戸とか、又は御目付などといふ表役の立派なものになるが、時の將軍が武を愛せられるので、此の不時の登庸がしばしばある。そこでこの講武所は當時壯年の登龍の門と稱せられた。其の「講武所風」の説明なるものを申しませう。頭髮の髻うぶの事を其の當時は「鶴鶴鬘」といひました。鬘も刷毛も曲

りて居らぬ眞直で。歩く度に鶴鶴が尾を叩くやうにかりかりなる。前の月代の額のあきは指二本這るだけ。それ小額を附けて置く者の參河奴は耳の上一寸とか丸奴たが反對の結果になつたものであります。それから稽古着であります。此れは大變古いのを貴ぶ。中には汗臭いぼろ／＼したのがある。然し之を極めて珍重する、それは丁度かの富士講の連中が先達の白衣の古いのを貴び、春中に赤い金印を隙間なく押されてゐる、汚い丈けれどけ有難いものになつて居るやうであります。それと同じであります、衣の地は眞岡木綿で袖は短い筒袖、それが二の腕までで肱から先は出るの不可い。そこで劍術では肱を叩かれるから血が出る。この疵を又名譽とし、た甚たしきは全体武術の修業をする者は襦袢を着ませぬ。そのかわりに刺したざら／＼する稽古着を着る最も可笑なる服装は、春熨斗目麻あし社あしで年始の回禮をする時分にも、五位以上の諸大夫は白、五位以下は淺黄無垢と極つてゐたのが、それが稽古着の上へ熨斗目を着まして其の上へ麻あし社あしといふ奇妙不思議な現象を見せたやうであります。それから劍術の道具即ち朱塗の胴、面、籠手これを肩から脊中へ掛けて居りましたやうです。それから留時はやつたキピラの割羽織は夏は奈良晒しの藍鼠で冬は

眞岡の風色と先づ極つて居ました。このキビヲのブツサキ羽織は大抵は漆紋の三つ絞で、中には異風を好むものは其の紋を郡青や朱で附けます。又前にも申しました如く、手には笥子の饅頭笠を持つて居ります。この笠を船頭笠とも云ひます。これは極めて粗末なもので雨にでも中ると直ぐつまらぬものになるとうであります、それが破れていけなくなればなる程却つて武張つて宜いとか云ふ不思議な笠で、殊にその形は少いのを喜んだとうであります。それは頭へ冠りても肩へ掛ける稽古道具へ聞へない様にどの爲めてあります。この度はこれにて止めることに致します次會に其の當時用ひよりました刀稽古袴及び白足袋を武士が多く用ひる様になつた由來等を御話して見ようと思ひます。

福本日南先生を懐ふ

會友、山本勉彌

福本日南先生本年九月二日溢焉として逝かる。先生は昨年十二月千葉縣大瀧中學校に於て講演中、卒然病を發して卒倒す。其後半身の不隨も漸次快方に向き、先生が主宰する中央義士會々誌に於て、其調査せる所を續々發表せられ居りしに、病更に變じて再び起たず、悲

しい哉。先生は文名一世に高し、然れども徒に文筆を弄するの士に非ず、其説く所は感激胸に溢れて迸り出づる所、其記する所は崇高なる性格の片影に過ぎず、先生嘗て選ばれて代議士となり、抱懐する高遠なる理想を實社會に問はんとして努力さる、其後擾々たる政界より退き己が氣質の最も適應する所に從ひて近代史實の著述に從事し或は國民の思想善導に力を致す、就中四十七義士の遺蹟宣揚に力を盡し以て青年の指導に任ず。

昨年四月先生地方改良會の講師として萩に來らる、や、偶然余の家に二泊され、圖らずも舊交を温むるを得、又本自警會の創立は先生の激勵も因をなし、其創立趣意書は先生の校正を経たるは諸君の熟知する所なり、先生と余との奇縁は先生と本會との奇縁を來たし、此好因縁も僅か一ヶ年余にして全く斷絶し痛痕に堪はずと雖、大和男子の眞骨頭を藏する先生の氣概は深く吾等を衝動し、先生の英靈は冥々の裡、吾人同志の心靈に交感するところを信ず、今茲に先生の書簡と余が昨年ものせる日南先生隨從の記より四五章を抜録して先生を忍ぶの料とせむ

先生の書簡

煤雨の候如何御暮らし被成候やなぞ存居候處に貴書に接し欣慰此事に存候御心にかげられ義士會員の御紹介に預

り多謝いふ所を知らず小生例により頑健日をわたり居候へば御放念被下度候御尋ねの明倫館上の談は、一國の獨立、民意の顯現、民命の尊重、國民の統一、大政の綜統以上今日世界の大事に順應すべく國民の當に努むべき五大條項として申述べたるやう記憶いたし候果してそれなりしや否や御即答いたし兼候御配慮の青年修養會もいよく御盡力により成立致し候趣貴地方子弟の爲に深く欣

ひ申し候乍末筆御令聞様に宜く御鳳聲被下度候御茶室の二宿は萩の地を思ふと共に永く心所より放れず御懐かく存候先は拜復まで如斯候

六月十九日

福本誠

山本國手 貴下

日南先生隨從の記より

萩高等女學校内美術展覽會場に於て最も先生の心を曳きたるは居天下廣居行天下大道云々の村田清風翁大幅の書なりしが如し。先生曰く清風翁は實に各方面に偉大なる人物にて、布に譬ふれば吉田松陰は精神的方面に其半巾を領し、周布政之助は事務的才幹に於て他の半巾を領す清風翁は此二を合はしたる大巾の如しと、清風翁追慕の情深きを知るべし。更に志都岐公園に向ふ指月山下、萬朶の櫻花正に爛漫陽

氣煥發すと雖、先生の眼に映するものは蕭條たる城趾にして、先生の心に浮ぶものは、先輩遺烈が發憤の狀なりしが如し、先生即ち感詠あり

萩城懷古

吹き返す志都岐の山の朝風に再たひ仰く天つ日の影。午後一時松陰神社に詣り、先づ米搗臺保存舎の趣意書を讀み、聽て社前に額突く、先生禮拜の狀を見るに百年の知己を地下に起して相語るの趣きあり。其より松下村塾に入り、先生の遺物遺墨及舊萩城の寫眞を觀る、寫眞のことより先生は先帝陛下御幼年時束帶正裝の御眞影が外人の手に收められしことに關し、先帝陛下御英邁の御事蹟を折柄拜觀の人々に語らる、尙松陰先生の眞筆を夫々音讀し感懐に堪ざるもの、如し、余等傍に侍る者亦一種の衝動を感せざるを得ず、外觀一陋屋に過ぎざれども稜威漲る靈堂は先生を捉ふること多事、漸くにして此を出で高田社司の案内にて寶庫に入り、先生に關する多くの書籍を見る。是より信國榑東校長の案内にて伊藤公の舊宅を見、玉木文之進の舊宅前より更に山路に入り、松陰先生誕生地に到る。信國校長は居村郷土史に精通するの隨一なり。先生は近世我邦歴史に通曉する巨擘なり、途上の史談興湧いて歩の移るを知らず、校長は松陰先生

が舊宅の見取り圖を擴げ、實地に照して説明し、建碑の舉を語り、山路改修の要を説く、誕生地は唯二株の椎と谷の一狹畑地に過ぎず、而も眼下一望十里、萩町は指呼の間に入り壯快云ふ可からず、氣宇自ら瀾大、山靈凝つて松陰先生を生せしを想はしむ、時代偉人を作るか、偉人時代を造るかは知る所に非ざれども、松陰先生により一雙の椎も靈樹となり、山間の凡井も靈泉となる、偉人は自己を靈化するのみならず、山川草木に生命を與ふるものなるか、先生は靈泉を手に掬して飲む、松陰先生の精靈を胸憶に收め、以て幽明相通するの意あるべし、先生復た感詠あり。

人精し人の眞入の出しに趾雙ひて護れ二本の椎誕生地の背後に高杉晋作、久坂玄瑞、吉田家、玉木家の墓あり、先先懇に是を弔ふ。

晩餐後北川大佐と共に四疊半裡、膝を交へて歡談盡くる所を知らず、先生巴里遊學中の全窓田中陸相に關する彼地に於ける奇談の如きは人をして頤を解かしむ、先生は余の望みを容れて椽大の筆を振る、書する所萩城懐古始め左記の五首悉く先生が自詠の和歌なり。  
七重山こびる八重雲打越わて望めば遠し九重の空

子松陰先生を理想の人として崇敬す、今若し先生松本の山中より突如として諸子の面前に出て來らば由衡の如く果して色を失はざるもの幾許ぞ。

松陰先生は一人腕を扼して回天の業を策し、身は牢獄に死すと雖、眞に邦家隆興の基を開く、諸子其意氣を學ばずして可ならんや。或は士は須く眞摯なるべしと述べ、或は久坂玄瑞が最後の從容たるを説き、諸子茲に緊張發憤すれば身体も昨日の如くならざるを悟るべく、歩行の足音も其響きを愛するを知るべしと、余等席に侍する者血湧き肉躍るを覺ゆ、況んや血氣盛んなる青年の感激したること如何許りぞや。岩田校長が近來斯くの如き結構なる御講演を得たることはなかりしとの讚辭も決して溢美の言に非ざるなり、余等修養談話會を創設して、生徒諸子の覺醒を促さんとしたる主旨、今先生に依りて最も力強く顯現せらるゝを見、余等が前日の希望全く茲に充さる。

(後畧)

※ ※ ※ ※ ※

足を掲げて船板ふりは天地は南に倒れ北に傾く國を建て、年の三千載毎春に神代なからの華咲きにけり

人を呪ふ追わらめやわれと我が爲す可き事の多き斯世に大空の星に轅を繋かんと車を急ぐ天の八巷

先生鳥鷲の娛樂あり、深更に及びしも尙旅情を轉す可く盤に向ふ、一勝一敗、老生一日の遊意を恣にせりと呵々として寝に就かる。

萩中學校に於て先生演壇に立たるゝや、談論縱橫、擒奔自在、多くの史料を巧みに取り扱ひ、生徒の意氣を感奮せしめざれば止まざるの慨あり。一二要項を記すれば左の如し。

生徒諸子、諸子は諸子の決意一つにより、松陰先生の如く神とも成るを得れども、唯衣食をなすを以て満足する如くんば是野犬にも劣る、諸子は神に達せんと努力するか、犬を以て満足せんとするか。

昔支那に由衡と云ふ人あり、非常に龍を好み、龍の畫幅彫刻等身邊殆んど龍を以て埋む、龍謂らく、由衡は我を愛する其比を見ず、我自ら彼を訪へば其喜びや如何と、即彼が書齋の窓に姿を現はす、然るに彼は眞の龍を見、驚愕措く所を知らず、色を失ひ倉惶として逃出すと、諸

### 詞藻

#### 蚊

第五學年 仁尾 重視

余は蚊を好む。刺さるるを好むに非ず。蚊の男性的氣質を好むあり。蚊は己の身に幾億倍する、然も万物の長ありと自ら誇る人間を襲ふ而してその生血を吸ふ。痛快ならずや。蚊の人を襲ふや、隠然來りて人の虚に乗ずるが如きなし、先、蚊としては満身の努力もて一聲名乗を揚げて、堂々と敵に肉迫す是余が蚊を好む所以なり、幸にも敵壘に達したる彼は、温き血を心ゆくまで吸ひて胡顔子の如き体して、又一聲して去る是彼の凱歌なるべし此の時吾等の一指動かんか彼の体は粉碎せらるるなり。思へ己に幾億倍する強敵と、堂々生命を賭して戦ひ然もその「甘き汁」を吸はんとする、一小虫を。富貴に諂ひ權勢に阿ね弱者の生血を吸ふにのみ、汲々たる現代の士は一小蟲蚊に學ぶべき所大ならん。

#### 蒲鉾賣

堪へ難き暑さに身を横へし、余は忽にして、華胥の國

に遊びぬ。覺ひれば、既に夕陽、面影山の老松に没せむとす。再び眼を閉ちて、徐に沈思す。暮色漸く四邊に迫りて法師蟬の聲、雨に似たり、法師蟬の聲に和して、遠近に響く聲あり、此地名産の一つ「蒲鉾」を鬻ぐなり、年齢十才ばかりより十四五才に至る。短衣跣足の少年、炎熱の中を走りて呼び賣ること立春より立秋の頃に至る。店頭に置けば腐敗早きが故なり。

草木も生氣を失ふ午過ぎより、夕づつの西の端山に輝く頃に至るまで、かの少年等は、街より街に、家に、呼びて止まず。而して彼等が一日に得るところ、多くして數金、純利數拾錢に足らずといふ。想へ盛夏酷熱の候、人皆涼を逐ひ、暑を避くるの時、哀なる聲張り上げて、「蒲鉾」鬻ぐ少年を、余例年此の聲を聞く毎に、訴ふるが如く。嘆くが如きその聲に、とぞ哀を催さざることなかりき。彼等の汗して得たる數拾錢何の要に資せらるるか晝の勞働を慰する父が晩酌と化するか。彼等が苦學勉強の基金なるや。

一日、納涼台に會せる友人に之を問ふ。曰く「小使錢を稼ぐのみ」と。余は重ねて問ひぬ「家貧にして筆墨を求むるに資なく、かくも苦心するにや。」友は笑ひぬ「れん身は物を美化するものかな、いかで彼等にかゝる殊勝の考

不快なる低級趣味の支那苦力を聯想するのみ。

短 信

謹啓秋冷の候 益御勇健の由 奉賀候さて私一身に關する問題につき御情深き御芳書有難く拜讀仕り候「安情の意味でなくして、人生は、最も平坦の近道を邁進致すが、目的に達する最善の手段なり」と、仰の通りに御座候、困難に出會致せば、それと花々しく戦ふは、男子の意氣地と存じ候へども求めて荆棘を跋渉致し、平坦なる近道を捨ててまで、迂道を歩み候事は、精力の無意義なる費消と相成るべく、却て愚の事に候へば、御志に従ひて此度の事は思ひ止まり、申す可く候色々御配慮有難く、感激罷在り候、私病は全くよろしく、身神爽快にて秋空の朗なるを喜び居り候御禮旁右御返書まで 拜具 (兄へ)

夏 の 午後

第四學年 藤井勝三

微風もない暑苦しい夏の午後は、総てが焼附く様な熱に死んで居る。油蟬の鳴く聲を聞くと、身が、何だか重苦しい様な氣がする。官道の、白い小石は、一つ／＼、まぶしい反射を見せ、路傍の草も、朝の生氣は何處へやら

へあらん。彼等が家は、さまで貧ならず。唯彼等は住吉祭禮の小使錢を得るのみ。されば、彼等が炎天の下に數十日間、汗と血によりて得たる貴き金は、唯數日の祭禮に投盡さるゝのみ」と余は己の感涙の見當違なりしを苦笑しぬ。彼等が數十日間の苦勞は唯住吉祭の氷水が目的なりしか。唯活動寫真輕業が最後の目的なりしか。氷水バナ、の爲に、かの大努力は捧けられたるか。

余は嘗て聞く、支那人は利を逐ひて、飄然家郷を出て異國に出稼す。身には一片の木綿を纏へるのみ。食は一日數錢に足らず。唯金唯富營々と努力す。十年の後、彼は少からぬ金貨を携へて歸國す。彼等は、その金貨もて新事業を興すや。否す。家郷に悠々餘生を樂むか。否す。唯一回の賭博に投するのみ。一夜の豪遊に散するのみ。かくして、無一物となりたる彼等は又刻苦す。寒さを物ともせず、飢に耐へ、死力を出して精勵す。何の爲め刻苦ぞ。何の爲め精勵す。彼等の一生は、實に此の反覆にありと。

余は、彼等「蒲鉾」鬻ぐ少年を、此等支那人と異るところなしと云ふ。誤れる勤勞をなす非なるかな。抵級なる趣味の輩なるかな。以後余の耳には「蒲鉾」呼ぶ聲聞くとも、一向物の哀も感せざるべし。誰彼等少年の呼聲は。

今は萎れて見るからに活氣が無い。松並木の下茶屋には、荷馬車挽等が午睡の夢を食つて居て、馬も、だるさうに眠つて居る。並木の下は、涼しいと見えて、通る人が皆腰を下して汗を拭ふ。近くの木で、また蟬が鳴きはじめた云ふべからざる毒々しい暑氣が一段と烈して襲つて來た。

夏 六 句

藤井勝三

夏 月 山住のこの涼しみや夏の月  
友の來て遊歩の進む夏の月  
朝 顔 朝顔に目覺機嫌や近所まで  
午 睡 青簾の讀書の聲も眠るか  
夕 涼 夕風に稻の穂波や門すし  
早 魘 夕立の他所に逃げり禱雨祭

名士の面影

北 汀

元田鐵道大臣歡迎の要件を帯び、渡邊代議士小倉町長に隨件して九月十八日上京し諸名士に接見するの機會を得、夫々感ずる所ありたるを誌す

原總理大臣

國の爲め千々に心をくたげども  
つゆさりけなき君の面容おもて

三浦觀樹將軍

雷のつよくも響く言の葉か

世の若者の思ひ足らねは

閑居せる田中大將を大磯

山下家の山莊に訪ふ

賜はりし暇に病もいえてぬ

やかては龍の雲をよぶらむ

傳へてを喜こひわはむ古里をおもへる君が心あつさは

元田鐵道大臣

鄙人の聲もあはれときかれけり

數あるつとめ負ひされぬ身に

代議士島田俊雄氏と

三度席を同うす

自らの力と物の理りを

とりて動かぬ君が精神まなし

渡邊代議士

佳景淵

崖を鑿り岩ぬく路や寒の水

鈴の茶屋

かやの水賣鈴のお茶屋も冬枯れて

千瀑洞口

四圍の崖わをぐも寒しへこはづし

摘錄

拾珠錄

宮内謙吉拾錄

明治天皇御製十首

雨だりにくぼめる石を見ても知れかたさわざとて思

ひすてめや

家富みて飽かぬことなき身なりとも人のつとめを怠

るなゆめ

器にはしたがひながらいははほをもとほすは水のちか

らなりけり

及ばざる事なかもひろうつせみのみはほとくの有

りけるものを

人の爲め苦き事のみ重なれど

いとふ色とも見せぬ君かな

長門峽初冬十二句

北リ

陶甕の地相すべく初冬峽に入る

切籠切窓金松岩など斷崖到る處に多し

寒流に突として崖一萬丈

長淵

氷雨すや危崖に驚畏の聲發す

岩固屋千疊敷

時雨るゝや岩固屋くゝる五人連

金郷門

朝霧や靈溪に入る岩の間

猿溪瀑布

飛瀑千態岩重なりて溪寒し

獅子岩

斷崖の獅子木枯を吹き下す

天狗岩

ちざれ飛ぶ寒雲高し天狗岩

萬碧樓

朝戸くれば小ゆるぎすなり霜の宿

國といふ國のかがみとなるばかりみがけますらを大和だましひ

曇りなきころの底の知らるゝはことばの玉のひかりなりけり

並びゆく人にはよしやおくるともただしき道をふみなたかへそ

政事出でゝきくまはかくばかりあつき日なりと思はざりしを

我れと我が心をりゝかへりみよ知らず知らずも迷ふことあり

をりゝに思ひぞいづる國のためこゝろくだきし人のむかしを

一、毎朝卯前後可起  
一、毎夜子前後可臥  
一、除賓客或疾病及難避事不可一日懈怠  
一、毎朝對案先整衣帶乃一座了非有事故不可妄動  
一、對案之間情念將生呼起正念可痛懲之暫時不可忽  
一、不可妄語雖下人不可接無益之言  
一、飲食須充飢渴不可過節及不可不時食飲

自警十條

- 一、雜念不問善惡最害於讀書之間戰々兢々可須防之
  - 一、讀書之時凝定志意不可急速又明張心目不可蹉過
  - 一、畢竟不過盡已職分以終一生則修行之間不可有功利之念
- 右十條欲銘心肝而操守之一一在天之昭覽敢昭告于百神之靈 (鳩巢室直清)

☐太陽を讃じて座右の銘とす

(乃木式より)

日は天體の王者也日は照さざる處なく暖めざる所無し日は公正の象徴也日光は玲瓏透明清き事珠玉の如し日は純潔の象徴也日は万物に命を與ふ日は慈仁の象徴也日出づれば万妖影ををさむといふ日は勇の象徴也こゝをもて日の神アポロオはその雄姿に於てその性行に於て男性美を代表す兒と生立ちて日の如くなれ

(大正巳未初夏爲村島氏)

馬場孤蝶

☐警句選 (現代より)

○男兒は生くべき生涯の事業あり、それこそ男一匹を剛健ならしめ、また果敢ならしむまことに彼は天職を有せるなり。

○青年期に於ては幼年時代は失はれ、壯年に達すれば青年期は失はるにはあらずや、而も以上の兩者は滅せるわ

けにはあらず。(以上イブセン)

○自由は義務を意味す、多くの人が自由を恐るる所以茲にあり。

○出来る奴が實行す、出来ない奴が傳道す。

○あらゆる誘惑を退くること勿れ、あらゆるものを體驗せよ、而して良きものに執せよ。(バアナアド ショウ)

☐タゴール三章

○東洋から偉大な藝術の出なかつた事は、物質や智力の上にも影響して、東洋は物質上の事、智力上の事を凡て西洋に仰がなければならなかつた。日本の氣概を以てするも支那の偉大を以てするも、印度の頭腦を以てするも東洋の文明は常に西洋に後れた、その後れをとつた根本の理由を探つて、吾等は新しい日本を産まなければならぬ、新しい日本の文明……とは鬱勃たる大思想大藝術の産出に伴ふものであることを思はなければならぬ(此の一文は三浦開造氏の生の實現(タゴール著)の序文よりとる)

……併しながら人間の偉大なる所以は、人間の靈魂が凡てを悟る事の出来る處にあるのだ。人間が硬い習慣といふ死んだ貝殻の中に自分の靈魂を封塞するといふ事は

い。(タゴール原著森林哲學生の實現中靈魂意識より)

或時教員が尋常四年生に向ひ、「途で金を拾つたらどうするか」と問ふに、先生や巡查や母に所置を頼む等の答の中に、一人級長曰く「ハイ拾つて見なけりやわかりません」と答へたりと、人の眞價は棺を蓋て後でなくては其眞底はわかるまい、此の答は實に意味深長にして皮肉を極めたる語ではあるまいか。(雜誌現代より)

乃木式より

ゆくりなくしてこそ珠はうれしけれ賣り買ひに似る今の交り。

現代より

苗代に引くしめ繩は世の中の人の命をつなぐなりけり。(前大醫院横田國臣十四才の時の作)

☐薄志弱行之特徴に鑑みよ

第二學年 山本 斌

▲「左記は某書中にあり讀む人自警の一端ともなせば余の幸なり

薄志弱行の通弊として私の今日まで目撃した多くの實例に就いて其の著しき特長を概括すれば大凡次ぎの六

悲惨な破壊である。……元より人間は自己の奴隷でも無ければ世界の奴隷でも無い、人間は愛せむ事を欲する者である。人間の自由完成は愛の中にある。愛とは完全な理解の別名である、此の理解により、此の人間といふ生ける存在の透徹力によつて人は凡ては透徹した靈、自己の生命の呼吸たるものに連る事が出来る(タゴール)

▲嘗てこの地球は太陽の膨脹力に依つて離れ來つた雲霧の塊に過ぎなかつた。として此の地球がまだ一定の形を成して居なかつた時には、未だ何等の美しい物も無く、又何等の目的もなく只熱と運動の塊に過ぎなかつた。處が段々それが求心力に吸ひつけられて、蒸氣が凝縮して一定の圓形にあるとダイヤモンドの頸輪の中にある綠柱玉の如くに太陽系の一星となつた。吾々の靈魂も、盲目的衝動と激情の熱動が各方面から靈魂を惑はして居る間は吾々は眞に與ゆる事も受くる事も出来ない。けれ共吾等が自制の力に依つて吾が靈の中心を見出さ、相争へる凡ての要素を統一し、離れ離れになつたものを統一する調和の力に吾が靈が和して來ると、孤立した印象は智慧となり一時的なる心情の衝動は完全愛となる。そうなれば吾々の生活の極些細のものが悉く無限の目的を表はし吾々の思想行爲は内的調和の中に結合して永久に離れな

項也

- 第一、薄志弱行の人は困難なる事件又は紛糾錯雜せる事柄に出遭へば忽ち周章狼狽して其れに應ずる適當の處置手段を講ずる餘裕を持たず直ちに屈伏挫折して終に之を厭ひ避くるの外之に反抗して當る勇氣と忍耐力とを奮ひ起す事は出来ないものである
- 第二、薄志弱行の人は其行爲常に不規律にして日々の起居行動すら正確なる事が出来ず従つて其の精神は快潤を缺き愉快に元氣に克く日々の業務に當る事が出来ぬ而かも其の精神態度に於ては騒々しくして落ち附きがない。
- 第三、薄志弱行の人は決斷力に乏し、一度決心しても忽ち變じ迷ひ徒に用心深く再思三考して尙ほ決する事が出来ない。而も忽ち變じ忽ち廢し狐疑逡巡して徒に氣を惱ますばかりである。其上過去の事を追懐するの念深く追恨懊惱の爲思ひを勞する事が多い。
- 第四、薄志弱行の人は慾望に打勝つ事が出来ず其の上氣がうつりやすき故例へば我等學生間にありて自身はナイフを持ちながら今頃人々の多く使用するナイフを見て新しきを求め或は過分の外見を張ら

一、利を貪る爲に學問すべからざる事

### 會報

誌

大正十年二月廿五日會員有志ノ吟行會ヲ催ス、志都岐社頭ニ集マル者柴田、高田、宮内、井原、四名ト長州新聞社主筆井上茂氏及山本先生ナリ、配布セラレタル吟誦録ヲ手ニシテ指月山ニ登リ、六島村テ脚下ニ眺メナガラ、交々或ハ聲ヲ和シテ聲ノ嘖ル、マデ大ニ放吟ス、更ニ芝生ニ圍座シテ感想ヲ談リ合ヒ、井上氏ノ志都岐城趾ニ關スル史談ヲキク、試験前ニテ來會者少ナカリシモ痛快ナル會合ナリシ。

第六回例會 四月二十三日、松下村塾ニ開ク。

一、山本先生發會ノ主旨演說

新入會員ニ對シ高田君宮内君井原君豫メ自警會ナルモノヲ紹介セリ、本日新入會員二十五名。

二、高田君ノ新入會徒ニ對スル注意並ニ本會ノ主旨實行徳目ヲ告グ。

三、宮内君ノ自警雜誌ノ口繪ニ對シ自己ノ所感ヲ述ベ

んとするの弊あり。年長じて一家の生計に於ても豫算のもとに收支を嚴守するを得ず終に家産あるものは減却し家産なき者は負債を生じ身の破滅を招くのである。

第五、薄志弱行の人は自己の意志を言明し又は斷行し得ざる爲に不測の禍を招く者が多い。

第六、薄志弱行の人は勇猛果敢自主積極の行動に出づる事出来ざる爲に實際上なせにも常に人後に落ち謂ゆる「ひけ」を取りつゝ行くが常である。

薄志弱行の通弊を概括すれば大要上述の諸点に歸すると思ふ固より各個人々々の弱點は限り無し而れど共通的なのは大凡是等の点である。

(終)

### 感

- 左記はいさゝか感せし事を某書より寫し來る
- 一、人をあざむく爲に學問すべからざる事
  - 一、人とあらそう爲に學問すべからざる事
  - 一、人をそしめる爲に學問すべからざる事
  - 一、人の邪魔する爲に學問すべからざる事
  - 一、己が自慢する爲に學問すべからざる事
  - 一、己が名を賣る爲に學問すべからざる事

且ツ考案ノ來由ヲ語ル。

高田君宮内君ノ率先ニテ會ノ盛大ヲ計ル爲に中學校控所ニ左ノ通り揭示ス

吾等ハ來ル六月二十六日午後一時ヲ期シテ第七回自警會ヲ松陰神社ニ開催シ以テ本會ノ主旨ヲ徹底セシムト欲ス。

會員ハ勿論有志者諸君ノ參會ヲ待ツ。

第七回例會 七月二十六日午後一時、松下村塾ニ開ク。

來會者二十七名、其ノ中新入會員六名。

學問ハ何ノ爲ニスルカ

心ノ力ノ一章解釋

蚊ニ就イテ

明治天皇御製朗讀

一、山本先生ヨリ第二號自警會雜誌製作ノ件呈出セラレ

一同之ニ賛成シ夏季休暇ヲ利用シテ九月上旬ニハ提出

ノコトヲ誓約ス。

九月二十九日

一、この力の力ヲ會員一同ニ分配セラル。

萩中學校控所ニ揭示ス

秋來る蕭々たる秋風は古城の跡を吹いて志士の墓標徒らに苔むしぬ。



皎々たる巴城の月は血湧き肉躍る我等青年が胸臆を照す。

書に親しむの秋  
筆を呵するの秋  
身を鍛ふるの秋  
心を養ふの秋

時や真に佳し來つて共に談せよ吾等が集ひに

第八回例会 山本先生宅に開く

來會者十名

東京土産話

吉田松陰先生の逸事に就いて

偶 感

山本先生  
仁尾君  
高田君

第九回例会 十一月廿一日松陰先生刑死ノ日ヲトシ、先生幽閉ノ室ヲ存スル舊、杉氏邸ニ於テ開ク、來會者十七名、伊藤痴遊著「吉田松陰」ニ據リテ先生ノ事蹟ヲ各自輪讀シ、其遺徳ヲ追懷ス。又山本先生北川大佐ノ所感談アリ、時ト所ニ相應シキ會合ナリ。

吟誦録 山本先生詩吟ヲ獎勵シテ青年ノ士氣鼓舞ニ便スベク、去ル二月吟誦録ヲ騰寫シテ會員ニ配布シタリシモ、其後内容ヲ取捨シタレバ、更ニ本誌巻尾ニ附ス

山口縣豊浦郡長府町  
山口縣阿武郡徳佐村  
山口縣阿武郡萩町吉田町

格東村

山口縣阿武郡福川村  
山口縣阿武郡萩町川島  
山口縣阿武郡萩町河添  
山口縣阿武郡萩町南古萩  
山口縣阿武郡椿東村  
山口縣阿武郡椿東村  
山口縣阿武郡萩町吉田町  
山口縣阿武郡萩町南古萩  
山口縣阿武郡椿東村後小畑  
山口縣阿武郡萩町堀内  
山口縣阿武郡萩町江向  
同縣同郡萩町土原  
同縣同郡椿東村  
同縣同郡篠生村  
同縣同郡萩町堀内  
同縣同郡椿東村

五 仁尾 重視  
四 藤井 勝三  
四 木原 秀雄  
四 羽鳥 彌救  
四 岡村 斌  
四 香川 義信  
四 波多野 義貫  
四 福田 幹雄  
四 山本 公輔  
三 杉 丙三  
三 井上 亮介  
二 福田 幸雄  
二 山本 斌  
二 藤村 五郎  
二 岩田 貞雄  
二 山本 浩  
二 三原 清治  
二 倉重 達郎  
卒 柴田 美稻  
卒 櫻井 武三  
卒 金子 榮一

自警會規約

- 第一條 精神修養ニ志シ、品性ノ陶冶ニ努ムルコト。
- 第二條 情誼ヲ厚クシ、親睦ヲ計ルコト。
- 第三條 本會ハ山口縣萩中學校生徒及ビ卒業生ノ有志者ヲ以テ組織ス。
- 第四條 本會ニ功勞アル先輩ヲ會友トナスコトヲ得
- 第五條 本會ハ一學期數回例会ヲ開キ會員ハ進ンデ感想ヲ交換シ、時ニ先輩ノ講話ヲ乞フコト。
- 第六條 遠足會ヲ催シ、雜誌ヲ發行スルコトアルベシ。
- 第七條 三、四、五學年ヨリ二名宛ノ幹事ヲ互選シ、會務ノ責ニ任ゼシム。但シ其任期ハ一ケ年トシ再選ヲナスコトヲ得。
- 第八條 入會セントスルモノハ會員二名以上ノ紹介ヲ要ス。

會員名簿

山口縣下關市西細工町	五	高田 良雄
山口縣阿武郡田万崎村江崎	五	宮内 謙吉
山口縣阿武郡福川村	五	柴田 敏夫
山口縣阿武郡萩町江向	五	井原 師郎

同縣同郡萩町江向	卒	篠原 智雄
山口縣阿武郡萩町堀内		岩田 博藏
山口縣阿武郡萩町土原		北川 爲吉
同縣同郡萩町江向		山本 勉彌
同縣同郡萩町河添		石川 修三

吟誦録

富士山	石川 丈山
仙客來遊雲外巔	神龍棲老洞中淵
雲如執素煙如柄	白扇倒懸東海天
泉岳寺	坂井 虎山
山嶽可崩海可翻	不消四十七臣魂
墳前滿地草苔濕	盡是行人流涕痕
大田道灌借養	
孤鞍衝雨叩茅茨	少女爲遺花一枝
少女不言花不語	英雄心緒亂如絲

訣別  
妻臥病床兒泣飢  
今朝死別兼生別

梅田雲濱  
此心誓擬拂戎夷  
唯有皇天后土知

出鄉作

佐野竹之助

決然去國向天涯  
弟妹不知阿兄志

生別又兼死別時  
慇懃牽袖問歸期

欲出題壁

僧清狂

男兒立志出鄉關  
埋骨豈唯墳墓地

學若無成死不還  
人間到處有青山

偶感

西鄉南州

幾歷辛酸志始堅  
我家遺法人知否

丈夫玉碎羞瓦全  
不爲兒孫買美田

櫻花詞

逸名

薄命能伸旬日壽  
零丁借宿平忠度  
滋賀浦荒飢暖雪  
南朝天子今何在

納言姓字冒此花  
吟詠怨風源義家  
奈良都古簇紅霞  
欲望芳山路更賒

寄家弟集作在松下村塾

乃木希典

刻苦悲酸感鬼神  
請看烈士功臣迹

履危寧復顧吾身  
不出尋常飽煖人

乃木希典

皇師百萬征強虜  
愧我何顏看父老

野戰攻城屍作山  
凱歌今日幾人還

水戶烈公

豹死留皮豈偶然  
人生有限名無竭

湊川遺跡水連天  
楠氏精忠萬古傳

細川賴之

人生五十愧無功  
滿室蒼蠅掃難去

花木春過夏已中  
起尋禪榻臥清風

西鄉南州

哭月照  
相約投淵無後先  
回頭十有餘年夢

豈圖波上再生緣  
空隔幽明哭墓前

奧平謙輔

霜滿軍營秋氣清  
越山併得能州景

上杉謙信  
數行過雁月三更  
遮莫家鄉憶遠征

高德題櫻圖

齊藤監物

踏破千山萬嶽煙  
單裝直入虎狼窟  
報國丹心嗟獨力  
數行紅淚兩行字

鸞與今日到何邊  
一七深探鯨鱗淵  
回天事業奈空拳  
付與櫻花奏九天

前兵兒謠

賴山陽

衣至耐袖至腕  
人觸斬人馬觸斬馬  
北客能來何以酬  
客猶不屬厭

腰間秋水鏡可斷  
十八結交健兒社  
彈丸硝藥是賸差  
好以寶刀加渠頭

無題

村上佛山

落花粉々雪紛紛  
白晝斬取大臣頭  
落花紛紛雪紛紛

踏雪蹴花伏兵起  
噫嘻時事可知耳  
或恐天下多事兆於此

一人敵耳劍何須  
吾愛姦雄曹孟德

足記姓名書亦迂  
帷中不睡讀孫吳

逸題

篠原國幹

飲馬綠江果何日  
此間誰解英雄恨

一朝事去壯圖差  
袖手春風詠落花

桂林莊雜咏示諸生

廣瀬淡窓

休道他鄉多苦辛  
柴扉曉出霜如雪

同胞有友自相親  
君汲川流我拾薪

乃木希典

山川草木轉荒涼  
征馬不前人不語

十里風腥新戰場  
金洲城外立斜陽

乃木希典

爾靈山險豈難攀  
鐵血覆山山形改

男子功名期克艱  
萬人齊仰爾露山

棄兒行

雲井龍雄

斯身飢斯兒不育

斯兒不棄斯身飢

捨是耶不捨非耶  
衰愛不禁無情淚  
兒兮無命伴黃泉  
焦心頻屬夏家救  
橋畔忽驚行人語

下通州偶成

奉敕單航向北京  
和成忽下通州水

大久保利通

黑煙堆裏蹴波行  
閑臥蓬窓夢自平

逸題

孤軍奮鬪破圍還  
我劍既摧吾馬斃

一百里程絕壁間  
秋風埋骨故鄉山

吉田松陰

休道航洋誤一身  
年纔三十量其德

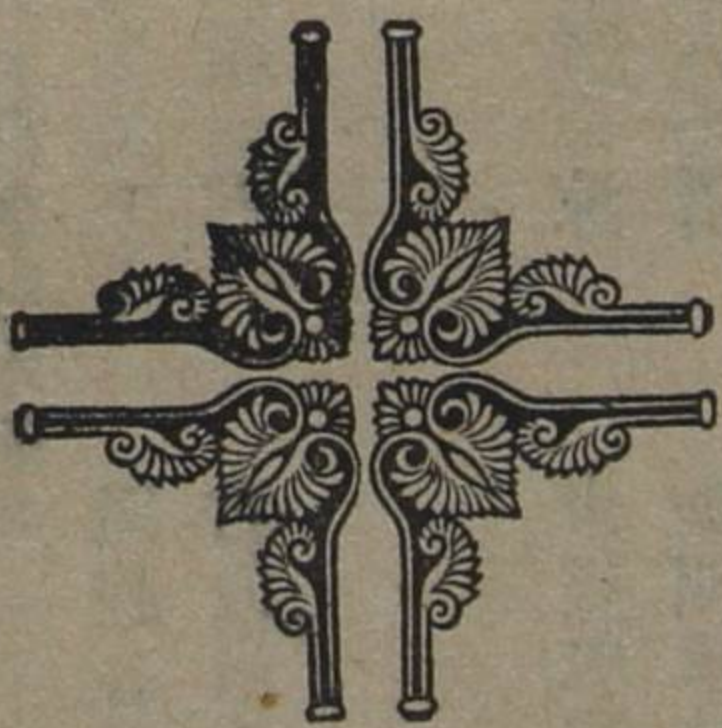
杉浦重剛

幾多子弟繼精神  
正氣凜然猶動人

吉田松陰

縛吾台命致關東  
夏木原頭天雨黑

對薄心期質吳穹  
滿山杜宇血痕紅



大正十一年三月十二日印刷  
大正十一年三月廿二日發行

(非賣品)

萩町大字江向第四百二〇二番地

山本醫院內

發行所 自警會

山口縣萩町

印刷人 溝部留槌

山口縣阿武郡萩町西田町

印刷所 株式會社 萩響海館

雜  
33  
のじ

白  
家

第  
參  
號

